野津原方言集

続 17

2011 6/28

和

野津原方言集　№１７

表紙画……　首藤和美
題字……姫野順子

★　ご協力いただいた皆様

那須量、吉岡禅哲、御手洗吾一郎、熊谷義人、奈須忠治、
秦清、河野智図子、甲斐肇、川西忠実、佐藤林治。
那須茂都女、河村アヤ、佐藤克治、安部蒸、川西哲生。
以上の皆様です。

★　利用させて頂いた資料

宇曾山物語、文化財調査こぼればなし、歴史記録資料、
野津原婦人会資料、本町老人ク歴史資料、原村小史、
月のうた、世界原色百科事典、肥後街道歴史資料。
以上の資料です。

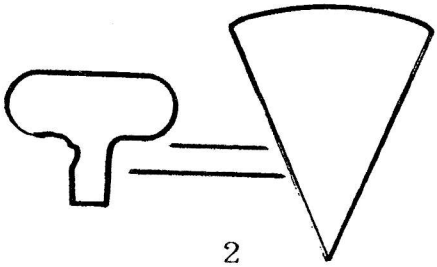
野津原方言集　続編№１７号

平成２５年１０月吉日

発行　野津原方言調査会

目次

民話、伝承……4
取り去られた石塔群
子供の逆修め目墓
歩く日近くなって
鞭焼き　初山　山の神
道は影べら
女性の底力……15
生きがい多い人生
ゴザ織音響かせて
誰やかれやん世話になる
方言子供んせ世界……21
清正公まつり
柱松
笑い事じゃねえで
米とはいつまでん仲良し
こぼればなし
昔ん農作業……30
米すり
米価の移り変わり
2月は寒い
旧正スケッチ
春3月になって
玉手箱……37
人材育成
小倉屋物語
一華和尚
甲斐医者挑戦
軍用馬育成
めぐり棒　あせり棒
米と藁との双六
ふるさとの味……53
酒粕汁　甘酒
ゆで餅
水車小屋の娘
あげな話こげな話……59
今市大火　敗戦
野津原ん名前
昔の野津原音頭
野津原も舗装に
民話　伝承……65
荷がおれた　あれこれ
五助街道⇨往還街道2……72
原村あれこれ
若者の頑張り
水車　飛脚の走り
支流に見る夢とロマン
南新四国88札所めぐり
新聞疎開
ちょつと一服……83
蛇の目傘
泥手で小豆選別
方言単語……88
《く》オ　から
後書き……99
伝言板……100



女性の底力、子どもの世界なんど　にゃ戦前の生活から戦後の苦労する世相の中で　引き上げ者　復員兵などを迎えた　故郷の厳しい敗戦の後まだ　不安定な時期でんあった人々ん　心の中にとにかく　お互いが日本人である。そげなプライドを堅持した『なるようになれ』の　気構えがあったかる　難関も切り抜けたのかも知れんごたる。

ごろり転がり込んだ家族　それに便乗した人たちもあった。が田舎ならなんとか食うにゃ　事欠かない事情もあったんか　何はなくてもお粥でも　雑炊でもダンゴ汁でも　口を凌げば生きらるるもん。人が人のために助け合う　支え合うからこす生きた　数年でもあったごたる。

昔ん農作業にゃ『ばっかり食い』が　大手を振り回しち歩く。今日はジャガイモ　明日もジャガイモ。今日はカンランで、明日たもカンランで　いいな。『いいで』しか言い様がなかった現実。じゃが不思議と病気もせんじ　生きちょつた不思議な事は　気が張っちょつた　生きちょらにゃ　死んじなるもんか　そげな生きる執念があったからか。

玉手箱　ふるさとん味にも　そげな片鱗が見られち　こげな話苦労も笑ぅち過ごせたもんじゃ。五助さんな飄々としち　肥後街道を旅んしとツレノーチ　野津原かる今市まじ　５回シリーズじ街道旅を№１１かる１５まじ　続けち人気ぅ呼びよったき　こんだ表往還街道を№１６かる　２０まじ野津原かる温見まじ　５回シリーズじ歩くこちなった。

前回野津原かる小岩戸まじ登ったき　今回は原村地域に旅人ん話とぎなっち　ヒヨカット面白い話　頓知んいいあげん話。

衣料切符が個人別にあっち　年間一人何点まじ買い物時代。酒、たばこ、味噌、醤油、マッチ、魚の配給なんかもあっち　もう　ちった匂いがしよった魚　道端じ切れん包丁じ　切り分けすると包丁に　旨い肉がチッタ付いちょるが　包丁を使う分の得かん知れんじゃつた。

キャラメルん配給も　ありよったもんじ　甘いもんがねぇき　干し柿　蜂蜜　サッカリン　ふんとあん頃ぁ　何を食わされよったか　不思議と腹痛もおこさんじ　痛うなってん入り薬じ　あとなしじゃきもぅ心配するんが　馬鹿らしいごたる時代じ。熊の胃なんかめって飲めん　銭もねぇしなぇ。

五助さんどま腹が痛えごつなったら　塩水飲んじょきゃすぐゆうなりよったそうな。

ありゃ悪口言いよったら　馬ん足音。

アオょ勇めよ　宿場はそこじゃ　あれが街道の石だたみ　ハ七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ……。

イツ聞いてん声が枯れちをよるのぅ　待ってました　も一つち若い娘が言うと　『ふんともう　おだてち』　ニコット笑うたひげ面が　なんか愛らしいのぅ。

表紙画の首藤和美さん　方言集ご愛読の皆様の　広がりで是非協力したいと　ご協力いただきました。可愛いいワンチャンとは　長い情愛がいつも　心を癒してくれ　優しい眼差しが　元気をくれます。物こそ言わないが　人の言葉や気持ちも伝わるよう。つぶらな瞳を見ていると　つい筆を走らせたくなる　その機会に無心にボールを追う　あどけないある日の　昼下がりでした。

●●●　取り除かれた石塔群　●●●

繁美城は記録じゃ５００年ほず　続いちょるが気品のある場所にゃ　今こす尋ぬるしも少ねぇが　戦後まじゃ産物生産の畑あり　松根堀りやら松油を取った　場所でんあった。そん古い場所にゃ歴史を語るもんな　何一つ残されちょらんき　不思議でんある。沢や丘ん上に古い石塔やら　墓石なんかあつたろうに　それが何一つねぇ。

江戸期んはじめに加藤清正ん　報告書ん中に書き込むにゃち慌てち整理したんかん。肥後領地になっち　２回も調べち報告するごつち命令が　再起ん危険性も恐れたきか　取りあぐるごたる問題点が　含まれちょつたんか。そげな憶測も出来るごたるがそっくり何もねぇなんか　考えられん事じゃが　裏を返しゃそん心にきー処理能力は　清楚すぐる対応んごたる。

高台ん下一体に　数多くん石塔や五輪が　立ち並ぶぬ見ると清楚まじ整理された　そん場所とを連想するんが自然。城ん始末とん関わりがち　憶測してんおかしくねぇごとも。踏みしめち見ると所どころに　フワーとする場所もある　『ドンド落とし』ち言うそうな　抜け穴かとん思うが　ロマンはそんままがいいか。

◎◎◎　子どもん逆修墓　◎◎◎

寺の裏庭に古い子どもん　『逆修墓』が静まりん中に　建っちょる。かなりん大けさと　そんスタイルんよさ　刻まれた文字に一部は欠けちょるけんど　当時ん財んある人が子どもか　孫ん為に生前に建てたんじゃろう。先祖代々の繁栄を祈願した　文字があっち童子供養としちゃ　珍しいものんよう。

この辺な古くは墓地が続いちょつた場所　のち福城寺が移転しち来た。名前も権現村寺町ち　つけられち最近まじ　『寺町』じ通っちょつた。当時は墓地や小さな寺も　もしかすりゃあった。そげな場所的な。石塔がならぶ風景が浮かぶんも　風情がある。じゃき寺も移るようになった。のじゃろう。

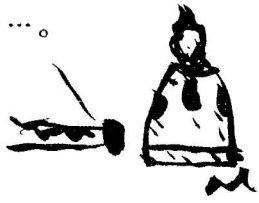
逆修墓も大きさから見ても　相当な財のある家の物と　思われるが近郷の人の名前も　彫られた残り字から　伺えるようじゃ。当時豊後州ん野津原村が　読み取れるき在住ん人たちん　家族のものでありそう。室町後期の作のよう。幸せにも寺の敷地にあるから　関係者は手厚く香や花は　捧げているよう。

◇◇◇　今市に過ぎたもの３つ　◇◇◇

丸山八幡にゃ拝殿に竜ん彫りもんが　取りつけちあるが　夜な夜な抜けでち手洗い鉢ん　水ぅ飲むち言う。そん話ぅ聞いた近くん信者が　そん竜ん尾を切り落としたところ　それかるは水飲みい　抜けださんごつなった。今でんそん彫りもんにゃ　尾先きは切られちねえち言う。

参勤交代ん頃　中川公ん祈とう所としち　建てられた万生寺にゃ　素晴らしい釣鐘があったそうな。そん釣鐘ん大きいこと　形ちん素晴らしい事　そん音色ん秀でちょる事。見る聞く人たちん目を耳をぅそりゃもう楽しませちくれよったが。戦運急を告げでえた時になっち　供出されちしもうた。今やいずこか　知る人もなしとか。忘却ん念にからるるこん頃。

供出しち果たしてそれが　何になったんかお国ん為に　本当に役たったんか　名鐘だけに疑惑もよぎるが……。



５Ｐ　松根堀、松油…戦時中に燃料が入ってこなくなり　ガソリンに変わる燃料として　使われたのが『松根油⇨ショウコンユと言う』　松の根を沸かして油分をとりだす。松の幹に傷をつけてマツヤニを集める。これらを精製して代用油にする。自動車などは木炭を燃やして　発生のガスを利用した　『木炭バス』が　走ってはいたが坂道は　馬力がなくて利用者は下車して　坂の上まで歩いて待つ。元気のよい人は押してその代わりに先に乗せてくれた。※　松根油工場が竹の内にあった。ごたる…ようです。心にきー…武士の魂と言うか奇麗さっぱりゴミ一つ残さない　いさぎさが不気味にもとれたよう　加藤清正も感服したと言う。※　城明け渡しなどもこのようにあったよう。逆修墓…生前に墓を作って建てておく意味。現在でも例があり　名前は朱を入れてあり死去の後これを取り去る。

６Ｐ　権現村…古くは権現村と野津原村があり《７００年時代》当時は　権現村に集落　恵良村《農家の集落》　野津原村《本町の東半分と恵良の西の一部に集落》　愛宕城下町になり権現が広がり　権現村寺町《本町の西半分》の時代が　江戸期前まで続いた。野津原村の本町古町に　権現の白山権現と平野祇園神社のお旅所があり　定期的に市が立っていた。室町後期…１５００年代。供出…戦時中に米の平等配給による政府の食料管理で　農家が強制的に政府に出す制度。割りあてが厳しくなり厳しいときは　強権発動の例もあった。その為に代用品をだしたり　それが出来ぬ場合は逮捕の例も。だけに農家でありながら　米飯が食えない人やヤミ米買いが流行　取締りも厳しくなっていた。厳しくなった当時は米や日常食料品　生活必需品　衣料品　切符制度などもあった。不自由な生活が強いられていた。勝つまではとでも。

じゃここじ米ん値段ぬ　ちっと入れちみろうか。なんさま　いつも米ん値段によっち　経済が成り立っちょつたに　こん頃ぁもうソッチノケラレチ　他所かるも米が大手を　振っち来る有様じ百姓はもう　いつん世でん無理強いされよる。はげらしいけんどなぇ。

昭和１６年　東条内閣ん時ぃ大東亜戦争が　米が一俵６０キロ当たり⇨１６円５０銭。じゃつたが　２０年に敗戦しち鈴木内閣ん時⇨６０円。２２年の芦田内閣ん時⇨７００円になった。５年過ぎた昭和２７年　吉田内閣ん時にゃ⇨３０００円に。

それかる１０年ほずした３８年　池田内閣ん時⇨５３００円になり　１０年後ん４８年にゃ⇨田中内閣　１０３９０円に。５０年三木内閣になると⇨１５６１２円。５１年の鈴木内閣にゃ⇨１７６０３円になった。じゃが米の値段は　ほかんもんに比ぶりゃまぁ安いごたる。８５年《平成２２年》なんと米価は　１５０００円くらい。それも供出しても実際に　現金が入るなぁ次の年になるとか。

外米が入ってくるき　農家が手持ちが多いと　売れ残り心配もあっち　売り急ぎするとチット　『まけちょきよ』と来る。『いいわあんたにゃ世話になるき』　そげ言わるりゃ人情としちムゲネェ。『決まった値じいいんで』　汗水たらしち作ったもぬう　自分じつけられん歯ガユサ。

アンマリ百姓をコナスト　いつか困るこたぁアリャセンナ。猛暑が無理こしゃりこ来る　そん年でん１６０００としてん家族じ夕飯食いに大分じ　ちっと贅沢したち思うたら　一人が３０００円に消費税　５人じゃき『夕飯一回に米１俵食う』いかに米が安いかふんとなぇ。

民話、伝承　『歩く日ちこうなっち』

『お前　好きなしゃオランジャツタンな』　母に聞かれち返事に迷うた。本当はおったんじゃが相手かるは　申し込まれちょらんき　それに家んつり合いもあった。親ん反対まじしち　押し通すのん出来んもん　娘心は揺れちょつた。『うん』　重てぇ返事に母もどうする事もならん。女は男しだいでんあった。

『あんしならイイチ思うで』　母にそげー言われち　エート落ちちいた。精米の水車小屋に行くと　友達も来ちょつた。『あんたいいなぁ』　話しもねぇそん娘は　やっぱ羨ましかったんか『うっとなんか　いつまでん　残るじゃろうなぁ』『そげんこたぁねえがえー』ち　言うたもんの　そりゃ友達に対する　心くばりじゃつたんか。

『あんた晩のこつ習うた』『ちゃーそげんこつえ』　母にそれとのぅ聞いたが　ここじやそん言葉は　濁した。クルクル水車は心地ゆう　音響かせち動いちょつた。仲良しじゃつただけに　心じゃ『済まんなぇ』ちでん　言いたげな善悪ん　2つが交錯しち友達ん仲まじ　引き裂きそうな思いも走った。

近所んしたちに『お茶入れゅする日』が来た。親戚んオバサンたちが加勢に来ち　ご馳走んシコウする。頭つきん魚を焼く　そわそわする気持ちゅ　落ち着かせちチット濃いめん　化粧する娘にも　いよいよヨシィ嫁ぐ日が　近づいちょつた。着飾った近所ん人たちが　昼過ぎにゃ揃ぅち座敷にちーた。

『長い間お世話になりました』　何年前かそれぞれも他所かるこん土地にお輿入れしち来た同じ　思いの繰り返しがここにも始まっちこれかる『歩くお別れの宴が始まる』　何年か前に迎えられたシタチガ　こんだ送り出す人生双六の日。

何回かお銚子を運んじ時も　でーぶ過ぎた頃に娘が　親に連れられち物言いに出た。『皆さんにゃ可愛いがって貰い……』今日ばつかしゃ日ごろん　仕事着ん格好じゃねぇ　馬子にも衣装がぴったりん　晴姿に『うっとどうも　あん頃があったなぁ』口口に小声じ囁く　それが娘ん耳に入る。目が潤むごたる時間が　刻まれ流れち行きよるんが　身震いするごつゆう解る。

先の事ぅ考えよると　不安と嬉しさとが妙に交差する。いいんじゃろうか　こんままに歩いても……顔が赤くなって一瞬膠着。『ほら　お酌して歩かにゃ』　慌てて『はい』　足は大丈夫かしびれは…『大丈夫』ほっとする刹那。日ごろわりと上品にしちょちたき　立ち上がれて　ふっと安心した。

祝言は第二の人生　一回りしち相手ん祝い言葉やら　励ましやら冗談まじりん小言やら　緊張したり笑うたりん一回り。『あんオバンないい事言ぅちくれた』『あんしゃ皮肉んごたる言い回し』『涙流しち　そうそうあん時のお礼を言われた』　水車小屋じ怒られたけんど　あん話がここじゃな』娘自身もいま　過去の問題の答えがつぎつぎと　答えになっち出たごたる。

いい機嫌になった人たちん　祝いん歌も出されち　控えた娘もあいの手を一緒に叩いて感謝しちょつた。脳裏に浮かんじゃ消え又浮かぶ　これからん自分たちん　イノチキが間ものう始まる。。もう引き返しは出来ん　最後の別れと　第二の人生んスタートでんある。頃あいを見ち長老に　『ぼちぼち万歳を』ち　勧められたき　『じゃなフンナ　うっとうがえ』『じゃがえ　年長じゃろう苦口言うんじゃなかろうな』　みんながドット笑いを　打ちあげたき　『お家繁盛　お嫁さんも万歳』　一斉に万歳と声高らかに……。この家めでたや　五葉の松に　鶴と亀とが舞い遊ぶハ　めでたいなぁ　めでたいなぁ。

◇◇◇　ムチ焼き、初山、山の神　◇◇◇

正月飾りを１０日にさげち　焼いた火じ竹先ぅ焼くんが　『ムチ焼き《鞭》。牛やら馬やらを仕事じ　追う時に叩くんじゃが　それが難い訳でんねぇ。こんムチじ叩いてん　怪我せんごつねぇごつする　牛馬に対した愛情ん　現れでんあったんじゃろう。農家にしちみりゃ　そりゃもう大けな労力ん　担い手でんあったきでんある。

初山は正月ん２日　にされよった。今年はじめてん山に入る。仕事こすセンケンド　山ん神に感謝し一年の　無事故を祈る心ん祭りでんあった。そしち　ナンテン、サカキなんかん花木を持っち帰る。これもシキタリんごたる　心ん浄化にもなるんか。人間の弱さを神たのみする　何かに縋った心ん祭りかん。

正月休みに子ども連れち帰ったぬ　ちょうどいい機会と山境を見　教えたりするんも　こげな時じゃきこす　ゆっくりも出来るんじゃろう。親かる子に受け継ぐもんの　一つとしちこれも財産じゃろうが　管理守りも大変でんありそう。じゃがありゃこす　いつか手入れすりゃこす　思わぬ報いもあるもんじゃが。

正月１６日ぁ山の神　お神酒を供えち　こん日は山には入らんじ　山の神に感謝し山仕事ん　道具つくろいなんか　ツボ先じする年寄り姿がゆう似合う。一年間の豊かに仕事が出来る　そげな思いを無言で託しち　それなりに張りこむ時　必ずやそん報いもあるもんじゃろう。

自然をデージするかるこす　自然も答えちくるるもん。イノチキも自然の中に依存する　そげな繰り返しん中じ　幸せに暮らせるんも自然を大事にすりゃこすじ　お互いが助け合うかるこす　自分どうも助けられちょる。そげな思いじナオライにするか。

方言説明

９Ｐ　オランジャツタ…居なかった、不在。あんしなら…あの人なら。うっとう…私は。ちゃーそげんこつぅ…あらまう　そんな事を。シコゥ…準備を。チット…すこし。ヨシイ…よそで。ちーた…着いた。シタシガ…ひとたちが。

１０Ｐ　ばっかしゃ…同じものばかりでは。オバン…おばさん、年配の女性たち。イノチキ…せいかつ。ぼちぼち…ゆっくりと、慌てないで。じゃなふんな…ですね　それなら。

１１Ｐ　さげち…さげて。焼くんが…焼くのが。叩くんじゃ…叩くのです、牛馬の尻を叩くと　叱られたと思って馬力をだす。あったんじゃろう…あったのです。しちみりゃ…してみると。そりゃもう…それは大変な。あったきでん…あったのですから。されよった…されていた。センケンド…しないけれど。なんかん…ナドヲ。シキタリ…きまったような作法の一つ。こげな…こんな。じゃろう…でしょう。あるもんじゃが…そんな例も多いようです。こんひ…この日は。つくろうなんか…補修などの整備作業。ツボ先庭の先の正月だから陽だまりのよい場所。デージ…大事に。ナオライ…お楽しみの一杯を勿論神様にもお供えしてから。

正月ん風習は地方によっても　異なりますが古い習わしを　大事に継承しているのは　大変素晴らしい事と思います。近代文化の発達で消えて行く　なくなるなど惜しまれますが　古いから良さも見直されています。そんな生活文化を大切にするのも　意義があると思います。

先人の考えた生活様式　物の節約にも通じる

そんな物一杯残っていますから。

『道は影べら』

庄屋さんの触れじ　新しい道ぅ作るき　山を別けて欲しいと知らせが回っち来た。貧しいけんど欲ぅハラン男は　気持ちゆう別くるこち話に賛成した。庄屋さんだって困ろうきと。欲ぅ張る隣ん男は『代わりん畑ぅクルルナラ　別けてんいいち返事したき　申し出た二人にゃ　それぞれ畑を世話するこち　なったもんじゃき　望みどうりん畑かえち　念を押したごたる。

庄屋さんも　無理言うんじゃきそりゃ　聞かにゃ済まん事じゃち　相談したらそれは叶えられた。

欲ぅ張らん男は『どうせ山は影べらじゃつたき　いい代わりん畑じゃなかろう』ち　半分は諦めち　影べらでんいいわい。ち思いよった。いっぽうん男は『なるたけ　陽あたりんいい畑を』ち　いつ返事があるかち待っちょつた。

一月ほずした頃じゃつた。庄屋さんかる『来てもらいたい』ち肝いりが　言うたもんじゃき　忙しかったんじゃが　後回しにしち出かけち行った。道を作るんがきまっち　縄を引っ張っちあったぬ見ると　『影べらをもろぅた　男の畑は道を　作るに山ん木を切ったき　陽がゆうあたるごつなっちょつた。

陽あたりんいい畑をもろぅた　男の畑は陽が　あたりすぎち暑い時にゃとてん　苦労したそうな。そしち新しい道は　木陰んあたる影べらを通ったき　陽あたりん悪かった　畑もみんなゆうなったんと。ある年んこと　日照りが続いち　雨が何日も降らんもんじゃき　折角ゆう出来た苗が　枯れちしもうたがちっと影がある男ん畑にゃ　程ゆう出水かあったもんじゃき日照りでん何とか晩方ん　出水やりじゆう出来たそうな。

腹がたっちコタエン男は　『くそ歯がいいのぅ』そう思うともう　一時もじっとしちょれんじ。『あいつかたん田の水ぅ止めちゃろう』　せんでもいい悪戯しよったら　丁度そん時井路に流れち来た『まむし』が　運悪く『ガシィ』　そん男ん指先に噛みついた。　★　まむし…毒をもった蛇で　すぐ処理しないと非常に危険。

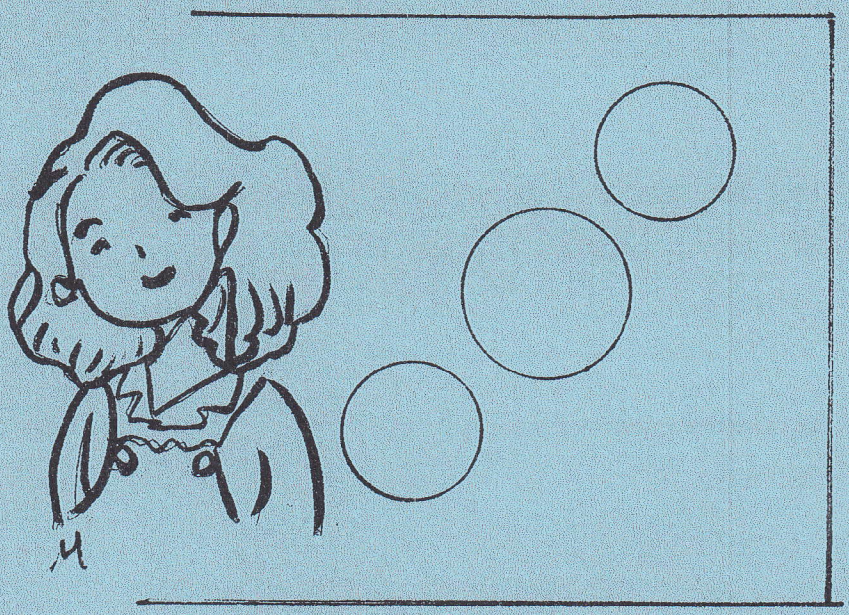
『ありゃいやり《蟻》が刺したんか』　まさか毒蛇たぁ思わんじゃつたか　帰り道道じ痛さがおかしい。『さてはマヘビか…《まむし》か』　すぐ口をつけち毒を吸い出す。何回か噛まれていたので　手当てが早かったき　命にゃ別状なかったよう。

そん時じゃつた　稲光りがすると割れたような　落雷じ大粒ん雨がテンショムショ　オシゲモネェ降りでーた。慌てまくっち家に飛びくうだ　そん男が『しもうた　こげー降りゃ田のミナクチぅ　はずさんと田がクユル。　★　ミナクチ…水の入る場所。テンショムショ　オシゲモネェ…大変に惜しみなく。

心配した優しい男が　田の水をはずしに来たら　『ありゃ誰か外してくれちゃるわ』　済まん事じゃなぁ『おおきに』ち頭さげち礼を言うた。だけじゃねぇ　水が流れこまんき壊れん心配もねぇ。『それにしてん　済まんことじゃなぁ』　まさか　あん男ん仕業とは思いつかん。

いいことするしの事はすぐ　連想さるるに悪事ん男は　頭に浮かばん悲しい巡り合わせ。でんもしかしたらと　心ん中じゃ思いついたかん　知れんけんど。そりゃーいっとき先ん話しになった。損をしたもんじゃが　損も儲けの始まりち言うが　果たしてこの男に通用するか。

女性の底力



15¢

△△△　生きがい多い人生　△△△

参勤交代に使いよった《使っていた》道路が　こん頃は視察に来るしも多い《人たちも多い》もんじゃき《ものですから》　時時にゃ顔見知りんしが《知っている人が》　よぅそん中ぇ《よくその中に》入っている。『りゃー珍しい《ひさしぶり》なぁ』今にも飛びつきてー弾む心ぅ　ぐっと押さえち笑顔がこぼれた。

すぐ側におるもんじゃき《住んでいるから》　声をかけちみると畑仕事しよってん《していても》　泥手をヒンヌグウト《手で泥を落としながら》『みんなずり研修な』『いっぺん見てえち言うもんじゃき　うっと《私が先生じゃこと》が道案内するわち　じゃきもう《ですからみんなが》　つれのうたんで。

なまかた《概略》案内しち縁側に案内すると　もうだった《疲れたんか》んかガヤガヤ言いながら　縁先ぃ腰かけち汗ぅぬぐうやら　『お不浄かして《トイレかして》くるる』『いいでちっとそん』　皆まで言うと心配するき《遠慮するから》　そこまでにした。懐かしい顔が揃ったもんの　でーぶん《だいぶ》年はみなとったもん。自分だけが若いち思うが。

『近ごろぁ絵は書きよんの』『いんげなこと《いえいえとても》と　口しめたが筆が進まんよう。編み物もしよったし　万能ん芸達者じゃつたなぇち　言うつもりもあんまり言うてん　かえっち悪いち自分も攻むるごたるなぁ　それだけ年を取ったんじゃろう。でも懐かしい話が飛びかうと　石だたみを見に来たに　そん話しゃ消えちしもぅたごたる《ようだ》。

繊細じ頭脳もピカーじゃつたに　『何すんのん《するのも》ヨダキャナッタ《大義になって》『あんたでんそげある　うっと《私が》がそげーあんな無理もねぇなぁ』『あんた若えわな　しゃんとしよえ』　二人は顔見合わせち　大声じ笑ぅた。

いつじゃつたか　可愛いい紙細工ん筆やらペンを　立てるに便利のいい小物を持参しちくれた。バスが来るからち遠慮しち引き上げたが　物腰といいたち振る舞いは　やはり気品があっち育ちが　ほのかに浮かび上がるごたる。人の面倒見がいいき物知りもあっち　人たちがすぐ仲良しにもなる。

編み物仲間が教えを請うと　知ったかぶりはせんじか　鍵をチョコット教えちくるる　心にくい話芸はさすがち思う。歴史は親譲りか詳しいので　聞くと止めないとどこまでも。じゃき古い街道の脇に住まうのは　似合いの達人かも知れん。物好きがツカマエチャ聞くと　そん話し方は個性もあっち面白い。

馬子が荷物のない道を　馬を引いて帰ってきたき　『儲けたな』ち　せがいきしょくに尋ねた。と返事がねぇ　『さては腹を立てたか』ち　思いがちなんじゃが　『どうして返事考えよるんと』『へーどげしちえ』『あんまり失礼な返事すりゃ迷惑ちまぁ　まわりくじー話』

真顔じ話　とっぴぅしもねぇ言葉が出る。昔懐かしい言葉遊びをしちょるごたる　優雅な世界に誘われち　一つ儲けたごたる気分にもなった。いつまでんサカシュしちょつてな。名物んガイドを聞きたいち　立ち寄る人たちんためにも　ぜひいつまでんタッシャじな　ふんな又合いましょうで。

★　方言説明　じゃき…ですから。サツカマエチャ…声かけちゃ。せがいきしょくじ…冗談まじりに。どげしちえ…とじうしてですか。まわりくじー回りくどく。とっぴょうしもねぇ…予想外な話に。サカシュー元気で。ふんな…それなら。

人の為になれば　世話になるた時に帰ってくるもの。

夏の暑さをよくるように早朝から　シットゥん取り入れが始まる。生々しい内に農具ん　分割機を使うちビーンビーン軽快な　音が朝んしじまに響く。『早ぇなぁどげな出来は』『うんまぁまぁじゃねぇかなぁ』　ちっと遠慮に言うのんやっぱ隣ん倉が立つと腹がたつん　例えじいい気はせん。

手早く裂くと手早ぅ縄じくびる。川原ん日当たりんいい場所に　さっと広げち一段落したところじ　朝飯になるが油断しち　こん頃にゃゆう来る『夕立雨』が　憎らしゅ突然降る事が多い。うっかり雨に濡らそうもんなら　もう干上がってん色が悪いき　値段がガタオチなる。

干る間に仕事ん区切りぅつけち　交替じ昼寝しよるがそげな時でん　本当は女ごしゃやっぱ　男しに働かせにゃならんき　小昼ん火焼きもシコせにゃなるめー。昼が長い頃じゃき仕事たぁハカドルが　ダリもタマッチ足腰が痛む。そりゅう無理したツケが年ぅ取っちかる　お医者通いとなる。

『よーいチット西が曇ったごたるど』　そん声にタマガッチ飛び起けた。早ぅ干したぬコヨスルド。飛んじ川原に行くともう　隣んしゃ手組がいいき　サゼちしまいよる。『夕立がきそぅじゃのぅ』『ふんとのや　晩に降りゃいいに　気がきかんのや』

そうこうしよると暗がったち　思うたらもう気の早えんが落てでーた。『今日は早かったき入れこねーたど』　威張っちょる内パラパラと　落てでーたもんじゃき　こん間に小昼にするかち　言いたげな顔に『火焼き食うかえ』『そうじゃのう今んうち片ずけちょくか』

ござになるにゃ縦糸に　イチビん皮を裂いた繊維を　タネリにしち掛ける。ござ織り機械に縦糸がかかると　干しあがったシットウイを　交互に縦糸を動かしながら　織ってゆくが技術がいるもの。リズムを取りながら懸命に　働く姿は素晴らしいが　重労働でもあり　地方では『皮肉に貧乏草』とも。

しかし夏の収入源としては　大きいけんやっぱ作る。そりぃ畑でも出来る兵でんあっち　農家ん臨時収入としてん　存在は多きかったごたる。ござ所じゃ『ござ織が出来りゃもう嫁に・やってんいいのぅ』ち　羨ましがられたもんじゃが　仕事する当人にしちみりゃ　苛酷な仕事でんあったごたる。

暑い盛りん重労働　気が許されん気品の作品　そげな品質が要求さるるだけに　精魂こめち織る為にゃ　心身の消耗も多きかったごたる。じゃが畳までは準備が出来んでん　ござは色も鮮やかじ長持ちもする　独特な性質もあっち　作る人たちは心こめた働きをつづけたよう。

普通の百姓が昼寝する時　『寝ござうちするか』ち　いう癖を言うのを聞いた。ござ買い商売人が寄っちきた。朝から買えんもんじゃき　気が急いで飛び込んだもの。あんまりムゲネーモンジャキ　ござ織ん上手なしを世話しちゃつたとか。まぁ渡る世間にゃ鬼ばかりじゃ　ねえごたるなぁ。

１７Ｐ方言説明シツトゥ…七島い草。どげな…どうですか。
隣ん倉…比べていら立つ。やっぱ…やはり。シコ…準備。ハカドル…能率があがる。ダリ…疲れ。タマッチ…多くなって。コヨスルド…小さくまとめる。手組…人数が多く。サゼチ…集めて。ふんとのや…そんですよ。
１８Ｐ　イチビ…繊維植物の名前。タネリ…練り合わせる。そげな…そんな。じゃが…ですが。あんまりムゲネーモンジャキ…あまりにも可愛いそうで。ねえごたる…ないようです。

だりんかりん世話になる

人間は世話にならんと生きられんもん。どげー威張ってん知れちょる動物でんある。『すまんなえ　頼むで』　どしてん出来ん針に糸を通すんが　ほんちょこっとん事じゃになぇ。隣んしゃー耳は遠ぃいが目はいい。じゃき　こつちゃ目はドンコンナランが耳ぁ　『地獄耳』ち　言うぐれ聞こゆる。

そこじじゃ　ゆう聞こゆるん所ぅ　隣んしと助けあうことじ世の中ぁ具合ぅ出来ちょる。『はい　2，3本繋いじょいたで』『りゃーすまんなぁ　そげしち貰うちょきゃ　いっときゃ頼みぃこんでんいい』『いつでんいいんで　でんえんりょしたり　時にゃオラン事もるきなぁ』『じゃなぇ　うっとも　ゆうオランキ』

着物を着ち行く朝ん事　どうも後ろべたん帯が気になる。『すまんが　こくぅちょいと結んじ　くれんな』『今日はまた張り上げち　どこ行きな』　『娘ん方が　お祝ち言うき　呼ばれんでんいいに　なえ』『ふんとな　呼ばれにゃ　苦口ぅ言わせんな』『じゃなぁ』　二人じ顔見合わせち　大笑い。

『あんたが　おるき助かるわい』『うっとうもで　隣同志じよかったなぁ』　若い頃ぁいろいろ　あったじゃろう　でん今はもう遠くん親戚よりゃ　こんしが　一番頼りもなり　助かりもする仲。じゃきいつも　気にかけ気をつけち　朝起くると　もう『元気じ起けたか』　じっと確かむる有様。

それが真実　信頼の出来る仲間なんじゃろう。そしてやんがちどっちかが　先に迎えが来るこちなるが……でんそん時にゃもう晴姿ち思うち　見送っちやりてぇもんじゃ。ち　おそらくは二人とも心ん中じゃな　想いよるんじゃあるめーか。それが真のお付き合いでんあろう。

方言説明

１９Ｐ　どげー…どんな。どしてん…どうしても。ほんちっと…ほんの少し。耳が遠いき…難聴で聞きにくい。目がいい…目はしっかり見える。じゃき…ですから。ドンコンナラン…どうにもならなくて。地獄耳…些細な事でもよく耳に入り聞きもするから。そこじじゃ…そこでですね。繋いじょつた…いくつか余分に繋いでありますから。そげして…そうして。でん…でも。オランキ…不在ですから。くれんな…貰えないでしょうか。うっとうでん…私でも。こんしが…この人が。やんがち…やがて。

女性の底力は無限に大きく　備わっているもので　だからこそ永遠に子孫が連なって行くもの。それに優しい母性本能は　男には真似も出来ない生まれ着いた　秘密な力が隠されているもの。腕力ではない博学と言うか　繊細な力学と言うか　生命力と言うか生きる源が　内蔵されているよう。

そこに個性が組み込まれて　結果が多様に分散して現れる。まさに不思議な現象細胞の輝き　宝石かも知れない。動物の本能にもあるが　人間は話す事や言葉に表現出来る。しかも喜怒哀楽を言葉とともに　感情にも表現するので　芸術的舞台などはその極みを見せてもくれる。涙はまさに宝石の輝きでしょう。

今回も場面を飾ってくださった　皆さんの人となりは実に素晴らしい　人間像を秘めているのでは。こんな人たちの集合体が故郷野津原を基盤として　形成されている事は頼もしい限りです。もちろんいろんな形で持ち前の　底力を巧みに発揮している多くの皆さんの隠された　横顔をこれからも毎回登場して頂き誇りにしたいものです。

多侯公邑鼎

野津原ん清正公まつり

野津原にゃ昔かる『清正公まつり』が　夏にあっちとてん賑かな祭りじゃつた。今から４００年ほど昔　江戸時代ち言いよった頃は　野津原は肥後領じ　熊本の加藤清正の領地であったが　飛び地であったから　特別に大事にされていたそうな。
加藤清正が亡くなって　細川殿様の時代になり　明治まで続くが清正の政治の仕方が　大変上手だったので当時の　領民は心を魅かれて細川領になり　明治になってから　大分県野津原になったが　今でん４００年前の殿様に　世話になったその恩を　お返しする気持ちとしち　『清正公まつり』をしています。

野津原神社の夏祭りが　清正の命日になるので　その清正の霊を慰め感謝する願いから　はじまったようじゃ。祭りにゃ盆に帰らん人たちも　里帰りしち御輿を担いだり大山車《ダシ》を曳きながら　遥か昔の清正公を忍ぶ　優しい人の気持ちを表す祭りでんあるごたるなぁ。

実際に御輿を担いじ回るのは　明治になっちからじ　大山車の曳き立てもそれより更に後じゃが　長い昔の先祖たちが世話になり　故郷の発展に努力してくれた　清正公はじめ時の役人の　心の誠に感謝する気持ちの　現われが祭りには隠されち御輿を回し大山車を曳き立つる事じ　お礼をしているんじゃち思います。

世話をする事は　やがて回り回って報いとなっち帰る。そこに人間としての価値もあるんで。欲張った人が病気になったが　お医者さんぬ呼びに行ってんくれん　心配しち見舞いにもきちくれん。加勢もしてくれない。これじゃいくら物があってん　物は代わりはしてくれんきなぇ。悲しい事じゃなぁ。

清正公まつりは『清正公市』とも言うち　三大市ち言いよった。『浜の市』『賀来の市』が　このへんじゃ賑やかな祭りじ　大山車《ダシ》を曳き出す時にゃ　郡役所に届だしをしち　お許しを貰いよった。『絶対迷惑かけません』ち約束文書だしたき　祭りには郡役所かる　わざわざお使いも参り　お祝ももらいよったそうな。

大山車《ダシ》の舞台じゃ　長洲《ナガス》子ども芝居も来て　動く度に祭り客がついて動く　そりゃもう一杯ん人で露天もあっち　孫に年寄りがあれこれ買う　そげな姿はもう祭りをいっそう　もり立てちょつたごたる。そこに御輿が来ると　それこすもう　賑やかさが一層大きくなっち　他所から来た人たちは　目を見張り若い娘たちは　御輿に追われると　キャキャ逃げ回る　追っかける　最高潮になったんと。

祭りが済むと次の日かるは　もう涼しゅなっちボチボチ秋の取り入れ準備に変わったもんじゃつた。近所ん地区の人たちも『他所ん祭り帰っちくるもんじゃき』　愚痴言いながらでん　やっぱ久しぶり会う元気な　姿に嬉しかったごたる。『もうイフヌンカ』　別れは辛いが　別れは出会いのはじまりでんある。

『だったなぇ』『あんたかた　お客が多かったき忙しかったじゃろう』『そうで餅ぅ３回も　作っち帰りにゃ待たするやら　しかと大山車《ダシ》ん　芝居も見よせんじゃつた。『なえふんともう　くたびれちだしもぅた』『そろそろ溝刈りせにゃなぇ』　こんだ溝刈りすりゃ　焼き米つくりになる。

清正公様もこげな話しを聞きながら　やっぱ嬉しいじゃあるめーかなえ。４００年も前の殿様で。こげな広い道もそん時作ったんで　幅約８メートルでなぇ。

柱松はなしすんの

盆の送り火にゃどこん家でん　ゆっくり先祖の仏様たちが帰る　道明かりに焚いたもんじゃつた。じゃがいつもなら　それがいいんじゃが　年によると病人があったりしち　出来ん事やら　出来てんほんの印ばかりん　送り火になることもあっち　折角ん盆の最後が　揃わんのじゃ　やっぱ何とのう見栄えもしなかったごたる。

長老が取り入れシノウ前に　皆んなが『地獄入り』ぅする日に　集まっちもろうた。『どげーじゃろう　送り火は皆んなじ作っち　辻に立てち道明かりに　するなぁどげーえかなぁ』　こげな話が切り出された。皆んなは長老ん話しを　じっと聞いちょつたが　顔見合わせち賛成のよう。

一人が『いい話しんごたるが　若いしたちや　子どもたちはどげ思うじゃろうか』と　意見を出した。長老ん話に反対じゃねえが　ここじこれから年をとる若い人たち　これかる大人になる子どもたちん　意見も大事な事でんあった。かるそん意見にも賛成があった。

『おおきに　みんなん気持ちがゆう解った』　長老も嬉しかったので声が　弾んじょつた。『そげん事になりゃ　これかるゆっくり話しゅう　皆んなじ決むるこち　しゅうなぁ』『お願いしますき』　年寄りん意見。『いつでんいいき　声かけちょくれ』　若い人たちも乗り気になったごたる。子どもたちも『みんながよけりゃ　いいき』　子供らしい意見。

里の行事としち皆んなじする　とてんいい事でんあり　仏様もきっと喜んで天国に　帰れると皆んなも思いました。心の中に明るい灯が燃えちょるようです。

盆が近づいたき　若い青年が音頭とっち『柱松』ぅ作るち言う。子どもたちはもう　張り切っち『どげなもんが』ち待ちきれんごたる。年寄りしも加勢するち言う。長老も嬉しそうに『ねじ鉢巻き』しち　出てきたもんじゃき　大勢が辻に勢揃いしたもんじゃき　隣ん組んしも『なにごとな』ち集まった。

長老は実はこれこれじと　説明したら『そりゃーいい思いつきじゃ』ち　真剣に見ちょつた。青年が竹を割ると大けな『じょうご』んような　駕籠ににたもんを　上だけ開けて組みだした。『こん中にノコクズ入れち』　肥松に火をつけち下から点ける。ノコクズがもえだすと　火の粉になっち散るき　『けっくしゃ美しいんで』　得意顔ん青年。

試験にしちみるかなぁと　チット火を点けたら煙りが上がり　やんがちノコクズが燃えち　火の粉が落ちて来た。『こりゃ晩なら美しゅかろうなぁ』　もうみんな大喜びになっち『ほんな今晩点けょう』ち　こちなった。燃え上がりヤンガチ　火の粉が舞い降りだした。

あんまりん美しさに『もちっと高くすりゃどげえ』『コエ松が入ろうか』『俺はうまいきー投げ入るるで』　声がでたもんじゃき　ちっと高くするこちなった。盆の夜空に燃え盛って落ちる火の粉。天国に帰る仏様も足もとを　照らされち楽しそうに帰る。なんとロマンと夢のある柱松。

そからはこんな風習があっちこちで　見られるごとなったそうな。長老の呼びかけに青年も　子どもも知恵を出しあう心の絆　素晴らしい盆の終わり行事らしいもんです。

笑いことじゃねぇで

隣んじいさんが麦わら帽子を　ぶらさげち来た。『じいさんおるかえ』　勉強しよったんか奥から　『じいちゃん　じいちん』と　大声じ二階じかたづけしよる　じいさんを呼びよった。『なんか』　その声で解ったから　外からオラビよる。『頼まれた麦っカラボウ　買うちきたど』

二階から下りて来た　じいさんは　キョトンとしち『や頼んかのぅ』　『お前言うたら　ヨカロウち返事したき』　とまぁ言い違ったか　聞き違ったか　問題が出来たようじゃ。たぶん『組合に麦わら帽子を買いに行くが　お前もイランカ』チ　思うて言うたのが　『いらないと言えばよかったに　ヨカロウ』と　返事したからＯＫと　思って買って来てあげた　のじゃろぅ。『よかろう』『いいで』では　『よい』『頼む』と思われる返事になってしまった。

『すまんじゃつたのぅ』『いんにゃそりゃいいが』　仲良しじゃき済む事じゃが　仲の悪い間柄ならヤヤコシイ事に　なり。かねない。

１と１は幾つ。じつは１，１０，１は　幾つと謎かけしたんじゃつたき　答えが本当は２であるが　１２にも答えらるる。ゴトゴトは幾つ。しばらく考えたが１０　じゃない３０と言う。さっきのこともあったから　相手は３０と答えるかと思う。じゃが１０とサット言うと　その通り。これは数字遊びじゃき計算の仕方にはおかしいが　謎遊びにゃ頭の回転もいいかな。

旅のひとが三佐かる竹田まじゃ『どんくれぇ』ち聞いたら　１３里ち言う。一時歩いてまた同じ事を聞いたら　『１３里』と言われた。どこで聞いてもなし１３里じゃろうか　おかしい

なぁち思うとこんだ　『ここから竹田までは』と　聞いたら『ここから竹田なら１０里かな』と　答えが返った。何ど聞いても『三佐から竹田は１３里』　これは動かせない距離です。『そうじゃつたんか』　ほっとした旅人は　のこり少なくなった旅を　クスット笑いながら続けたそぉな。

『猫が来るかん知れんき　ゆう見ちょきなぁえ』　用事で出かける　お母さんが三郎に『干し魚』を　猫が食いにくるかも知れんので　留守番頼んで出かけた。あんのじょう猫がねらいよる。『来たな』　三郎は猫はどんな格好で　魚を取るのか興味も湧いたので　じっと見つめていました。

そのうち自分が留守番を頼まれた　そこをツイ忘れてしまい狙った　猫が魚をくわえるまでを　じっと見守りそん上手さに感心して　うっかり留守番を忘れかけました。『しもぅた』と急に自分にかえって気がつくと　猫は一匹の魚をくわえて　逃げて行きました。『こいつ』追っかけた三郎　でも早さは負けない猫　一匹は犠牲になったのです。

『なにえ　怪我せんじゃつた』『うん』　きまり悪そうにお母さんの顔みると二人は　大笑いしてしまいました。『いいよ怪我せねばな　猫もたべたいからなぁ』　さすがにお母さん油断していた三郎の　事は攻めないままに　『ご苦労さま』とご褒美におみやげを貰いました。

世の中にゃ考えると　噴き出すごたる話があったり　笑いが止まらごたる話に　出会うが人に迷惑かけたり　怪我させたりしないなら　まぁユーモアもあっち　いいんじゃねぇ。人の失敗したときは笑わないのが　礼儀と思うが相手が笑う時は　心を思って笑うのも　よいかもね。

★★★　方言単語　★★★

２１Ｐ…飛び地…自分の領地から離れた場所にある領地。肥後領…現在の熊本県５４万石で　清正親子で約２５年。の後細川領地の支配下で幕末まで。

２２Ｐ　三大名物市…浜の市、賀来の市、清正公市《当時の大分郡。で》明治の中頃からの賑わいで　浜の市の御輿は静静と野津原の御輿は勇ましく。

２３Ｐ　コエマツ…赤松の根の肥えた部分。シノウ…取り入れ前。柱松…仏が億万浄土に帰る時の見送り明かり、送り火の事でオカラを１６日に燃やしていた。１５日の所も。

２５Ｐ　オラブ…叫ぶ、大声で。麦カラボウ…麦殻を編んで作った帽子。ヨカロウ…よいでしょう。イランカ…いりませんか。いいで…よいですよ。いんにゃ…いいえ。どんくれー…どのくらい。

２６Ｐ　しもぅた…しまった。じゃつた…でした。いいんじゃねぇ…よいのではないですか。

米と藁は生まれつき仲良し

稲がウレテ米が実ると　藁ん着物脱いじ裸になる。長い間の世話になったもんの　そんままサイナラじゃねぇ。仲良しじゃきすぐ俵になった藁と　また出会うた。『やんな元気じゃつたか』『おう元気しちょりゃこす　またお前に会えたのや』　籾が米になった後にゃ藁が　縄になり俵になり　米すりがかんだら　こんだ米俵に入る。

上手に縛った俵は米ん検査んあと　町に送られち行くけんど　そこにゃ湿らんごつ　藁をしいち積み上げた　俵にゃ藁じ囲いもしちゃる。じいさんが草履ぅつくり　ばあさんな藁を敷いた　床ん下ん穴にトイモを囲いよる。温度があんまり変わらんき　寒い冬ん間にゃここじ　寝ん寝するんと。

藁ん効用…昔ん屋根にゃ節約すりゃ　藁じでんまにあう。大けな家でん『にわかツクロイ』にゃ　藁ん逆葺きもしよったが　これでんチョイトぐれは　時ん間にあう。

冬ん寒さよけん藁囲い、物置小屋ん屋根にゃ藁が手早ぇ。トイモん伏せ床づくりにゃ　藁を上手に立て竹じ挟んじ　上ばを組合すりゃ出来上がり。トイモん蔓が出来ち　植えつけすりゃ後は　冬ん麦植えん肥になる。キンカンが実に霜よけん　藁帽子も絵になるで。

藁ち言うな稲、麦ん茎がイロイチ固ぅなったもん。麦殻葺き屋根にゃ欠かせんもん。いっぺんに大けな家葺きにゃ　量が難しいもんじゃき　3回か4回に分けち葺き替え。時間も適当じ手間がえもヒズネェ。竹時んいい時ぃ近所んしと手間替えじやっちしまぅ。

こん時にも藁縄、敷物なんかにも藁が出番。縄は農家にゃ必需品じどん仕事にも　縄ん出らんこたねぇごつ　役立つき雨降りやら秋んヨナベにゃ　縄ないが弾む。若い青年団なんかは　藁すぐり、縄ない　俵編み　サンドウラ作り　藁蓑　藁ホゴ　藁草履　足なか　わらじ　藁靴　どくぅ見てん藁が使われちょった。

オヒツにとった飯が冷めんごつ　藁じ上手に作った入れ物、たわし、ほうき、編み笠、しめ縄、円座ふとん、藁ぶとん、筵、かまげ、アンペラ、タタミ床、蚕用のマブシ、畜舎の敷き藁、土壁に入れる藁、モッコ、荷覆い、堆肥、肥料、灰、うら盆送り火、用途はテンショムショ多い。

藁をスグッチ

夜食に若い　あれも年頃　嬉しさ隠す……ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ。

２７Ｐ　ウレテ…実って。床ん下ん穴…農家の床下にゃほぼ大きな穴があった。広さは２〆１，５メーター位の深さも１メーター位。寒さをよけて保存する設備。トイモ…甘藷。

２８Ｐ　チョイト…少し。イロイチ…乾いて。屋根替え…麦殻屋根の場合は　２０年間くらいは大丈夫だが早めに　近所が手間替えじお互いに支援する。吹き替え用の麦からは　毎年蓄積して使うが　交互に使うので蓄積も　みんなで交互に譲り合う　助けあいでもあった。

青年団が作業を共同でする　そんな習慣が継続されて　素朴な風習は作業の能率　無駄を省く　お互いが気くばりする事で情愛交流　無駄を最小限にしていた。若い人たちの愛情も芽生える　そんな機会にもなっていて　めでたくとゴールの人も。農家の厳しい生活を理解しあう　そこに効率のよい新婚も。

屋根替えでは農家が　薪を燃料にしていたので　屋根裏には煤がたまっている。これが病虫害防止の役もしていた。不思議とネズミ　青大将もいるけれど　これも家を守る大きな役割を果たす　お互いが共存した生活環境でもあった。こんな動物がいる事で　家も栄え　火災も事前に察知し　幸せの基盤であったごたる。

屋根替えに若者が　キザな姿で眉毛も剃り落としていた。老人の注意をむげに反発していたが　途中でにわか雨になり　煤汚れが構わず目に入った。『どうなるか早ぅ顔洗って』　ドナラレタ若者慌てて洗顔……『やっぱ年寄りぁ伊達に年は取っちょらんわい』　危なく目が痛むはずも　辛うじて助かった。『じいさん俺悪かった』　笑顔の老人もほっとしたそうな。見かけによらん　素直さに『ふんともう』ニッコリ笑った。

藁を使うもんにゃ人間とやっぱ　密接な関わりがあるもんじナットゥも　これがありゃ出来る。かがし、藁人形にゃ呪い話、も浮かび上がる。結び紐にも　亥の子祭りん槌にも　藁灰は線香立てに入れる。土佐ん鰹んタタキにゃ適役。藁こずみ、藁囲いなんかは　自然の状況を豊かに奏でるごたる。

好きと言えない　風呂焚く暮れの　あれも１９の身を焦がすハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ。

避けた夕立　ゴザ引き寄せて　子供のママゴト　一休み　ハ七瀬のせせらぎ　小鮎が　スイスイ　ホイホイホイ。

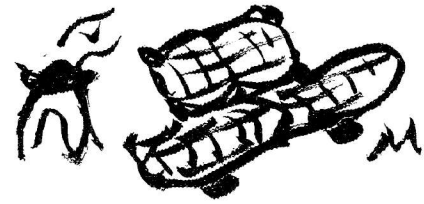
早く行きよと　気早く義姉が　親に内緒の　戸を開ける　ハ七瀬のせせらぎ　もみじが　チラホラ　ホイホイホイ。

七瀬馬子唄から

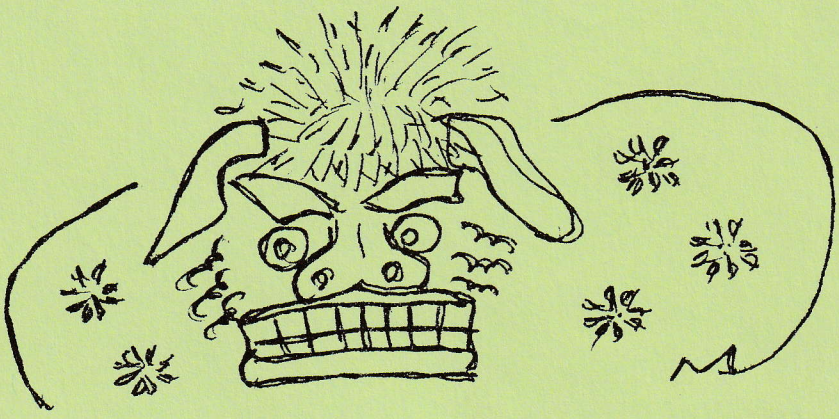
小作米も納めち残りが　藁を敷き詰めた俵置きに　積み上げられちょる。『お前どうはここじ　ヒョウロウじゃの』『じやで　いっとき又シャベルルナァ』『おとなしゅせんとの』『じゃなぁ　寒ぅなると火のクロガドウイイカ』　藁と俵ん米が又とわず言うことじゃろう。

ヒョウロウ…食べ量ん備蓄米。せんと…しないと。火のくろ…火のそばが…竈がそばにあるから　一等席でんある俵置き。とわず…冗談まじりの明るい笑い話。じゃろう…でしょう。

新しい藁の匂い　竈にかけられた鍋から　この家の人たちの暮らしの息き使い。豊作でなくても家族が元気なら　これに勝る幸せはないのでは。年とりも約束された　年末でしょうから。



昔以貴作



31 ←

１月…昔しん百姓は旧暦を使う　仕事になっちょつたき正月　ちゅう頃は　籾スリん真最中じゃつた。粉雪はチラチラ舞う中じ次次と米が　機械を通っち仕上がる。くわえ煙草ん年寄りたちゃ　若いしどうが働くぬ　頼もしそうに笑顔じ見る　そん横顔にゃ『俺どうもゆうやった』ち　言いたげな。

スクイじ籾ぅ掬いくうじ　籾スリ機械に入ると　もみ殻がハナト先に飛び出しち　中にゃ重てぇ分が落つるんを　そにん女ごしが手ミイに　すくいあぐると手際ゆうサブル。残ったな牛馬ん餌ににもなるき　ちっとでん取り上ぐる　勿体ねぇ気持ちがひしひしと伝わった。

俵に詰めた４斗ん米ぅ　うまい具合に口蓋《サンドーラ》をいれて縄取りすると中封絞めん　機械にかけち締め上ぐると　年寄りん出番になる。『しゃんと抱えちつけや』『あい』　トントン　そんたんび絞めち見事瓠形ん　俵が出来た。『やんな力があるのぅ』『そうでんねえけんど』笑顔がこぼれたき　みんなも笑い声になる。

『ちょいと茶をぬうじおくれ』　『そうなほんなヨバリュウカ』　発動機も止まっち煙りに出よった　独特な石油の匂いが　今年ん出来んいいぬ知らするごたる。『俵が足らんどイチアキでんいいど』　嬉しい年寄りん声に　『捜しちみるき』　奥に入った親父　クスッと笑い声じ　バアサンに合図したら　『そりゃまぁ　茶オキャネエガ』　『イイワナ晩にいっぱい出すわな』

子どもたちゃもう凧あげしよる　風が冷てぇけんど『子どま風ん子じゃのぅ』　笑顔がこぼるる　ツボ先ん陽だまり。

寒さが厳しゅなっち　ヒビギレ、赤ギレも　ゆう出来よったもんじゃ。山仕事ん薪もん取り　子どもがかけたワナに　鳥がかかったもんじゃき　もう鬼ん首取ったごたる　大声じモドッチ来る。早いしゃ餅つきぅしち　若い嫁さんどま婿じょうと里帰りが何よりん楽しみ。甘酒が飲み頃ち畑に出ちょる　近所ん嫁さんにゃ声がかかる　『いつも済まんなぇ』『心配せんでんいいんで』　近所付き合いが上手じゃき　皆んなかる好かるるんは得人じゃこと。

米ん値段もでーぶん変わっちょる。ちっと書き並べさげーたら……天明元年《１７８１》にゃ１７銭じゃつた。現在の１円の百分の１７。になるきチョイト金銭感覚がややこしい。

明治２８年《１８９５》日清戦争の済んだ次の年…４円。
　　３８年《１９０５》日露戦争の済んだ次年…５円２８銭。
　　４２年《１９０９》米の検査制度出来る。４円に決定。
大正元年　《１９１２》８円３２銭。
　　６年《１９１７》６円。
　　９年《１９２０》総人口５５００万人になり　２０円。
　　１２年《１９２３》関東大震災の年　１０円４０銭。
昭和元年　《１９２６》１２円８０銭。
　　５年《１９３０》６円２８銭。
　　８年《１９３３》満洲事変あと　１０円８０銭。
　　１６年《１９４１》太平洋戦争になり　１６円５０銭。
　　２１年《１９４６》戦後　２２０円。値上がり時代に。
　　２３年《１９４８》１４８７円。７倍に跳ね上がる。
　　２５年《１９５０》２０６４円。
　　２７年《１９５２》３０００円になった。
　　３０年《１９５５》３９０２円。
　　３５年《１９６０》４１１７円。
　　３８年《１９６３》５０３０円。さらに値上がり続く。

２月……一年のうちでん一番寒いな　やっぱ２月じゃろう。
　　旧正月頃じゃき無理もねぇが　里帰りした若い嫁ごどま　やっぱ母親に甘えてぇな　自然の習わしでんあろう。婿じょうもここじゃ大事にされち　割木ぅ割る加勢をすりゃじっと　見つむる親父が『頼もしいやつじゃ』ち　近所んしどうとんヨリにゃ自慢する。

セリが食卓賑わし　沈丁華、紅梅、すいせんの香りが心まじ和ませちくるる。気早いウグイスん声も聞かれ　薪取りに山に入った若いしたちん　話し声がなんとんのどか。好きな娘ん分まじ手早う集むる　そしち束の間ん楽しい語らい。春にゃどうやら夫婦になるらしい。

富山ん入れ薬屋さんが　そろそろ回っちくると　子どもたちが賑やこうなる。薬をガイト使うとみやげも多いき　それが待ち遠しいが親は支払いが　ちっと多ぅなる訳。各地を回るからか情報も多いもん　新しい百姓仕事ん足しになったり　アイデアももらい出すき　昔かるこげな人たちには　全国どこでも行き来出来る　許可証を貰っちょつたそうな。

『まぁゆつくりしち甘酒が』『済みませんね忙しいのに』さすが商売人　言葉使いは丁寧で人の　悪口は絶対言わないから　何よりも信用されている。時折の嫁ご話やら　婿捜しの世話役も頼まれるよう。人の心が通い合うと　思わぬ良縁にも巡り会う事さえあるもの。

春の七草…セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズシロ、ナズナ《かぶ》の７種。餅の食べすぎ　酒の飲みすぎん胃腸を　守る生活ん知恵でんあったよう。こげな習慣物知りん知恵が　お互いん生活イノチキぅ　心豊かにしちょつたんじゃろうなぁ。

古くは正月の月じゃき『旧暦おめでとうございます』と　挨拶回りする人たちが　『手拭い』やんがち『タオル』に変わる　心の絆の贈り物。正月３日盆２日と言うごつ　ゆっくりヨコウ。後１０日正月、１５日正月、２０日正月とまぁ　旨い具合に休みを作り生かす。

それでん片や藁細工んカマゲ、ムシロん修理。田の畦ん修理つくろい、井路ん手入れなんかが　それぞれ家じされよった。午前中は寒いし凍っちょるき　山の仕事に取り組み　昼からは畑や田の仕事じ　麦ん手入れ中打ち　麦踏みなんかもそりゃもう　暇さえありゃゆうしたもん。土入れしち寒い時に根を張らする。

２月ん誕生石ぁ『ムラサキ水晶』…誠実、心ん平和。花になるとウメ、ツバキ、ハボタン、スイセン、ユキワリソウ、ユリ、ベコニヤ、シクラメン、ヒヤシンス　なんかが顔をでーち目を楽しませちくるる。

里に帰っちょつた嫁さんも　土産荷物を後ろ前にかるぅち　笑顔がキラキラ光っちょる。オカチャンの乳を腹ひとつ飲んだか　こげな繰り返しによっち　だんだん気持ちも心も今に慣れ　親しんでやんがちこんだ　そん娘がよそに嫁ぐ繰り返しの　人生双六が巡り会わせた　宿命によっち結ばれち行く。

あん娘としごろ姉さんかぶり　いつか覚えた馬子唄を　ハァ七瀬のせせらぎサラサラサラサラ　ホイホイホイ……。五助さんが唄う馬子唄が聞こゆると　『今日は炭だしかな』　山並みに煙りが消えたち思いよったら　早ぇもんモウ炭だしになったか。日の立つなぁ早ぇき　テレテレしよるとすぐ春になる。

『ちっと夜明けが早ぅなったごたるなぁ』『じゃろうもう旧ん１５夜じゃねぇ』『そうか　それじ明りいち思うた』『またやんど朝がえりじゃつたんか』『違うで家じ寝ちょつたんで。

３月……弥生で２０日正月がこの月に　なることもあり春とはチゴウタ感触。でん季節はまだ寒い朝もあっち『春遠からず』の感もする。猫やなぎ、レンゲ、ツバメ、ワクド、ヒバリ。野焼き畦焼き　井路ん補修ババサンがゆう似合う　ヒナ人形ん飾り付けん手裁き　絵になる風情がある。声が聞こえたんか振り向いた　『こげんこたぁゆう聞こゆるんで』『何え何か言うた』『いんげハリコミよるなぁ』　皆んなん笑顔が春らしい。

春田起こしが始まる　前畦ぅ切り落とし　すき返えーち土ん中かるワクドが　ひょいと顔でーた。クモも慌てちエバを張ると　もう土ん温もりかる湯気が出る。麦が背伸びしよる横じゃもう　田植え前ん準備が進んじ　百姓ん忙しい仕事がゆう解るごたる。そげな繰り返しが米にも結びつく。

神楽拍子が聞こえちお宮にゃ　祭り客なんかも孫連れち露天の玩具に財布が緩む。薪物小屋にゃ新しい束が　積みあげられち『やっぱ張りこむしゃ違うのぅ』　祭り客が噂しよる家はいいが　病人があったりしちそれも　ままならん家んしゃ束もちっとじ　トーミーが寂しそうに据えちあった。

彼岸の中日にゃ地獄ん釜ん蓋も　開くち昔かる言いよったが　こん日はゆっくりヨコウチ　墓参りするしもあった。供えた『ボタモチ』　祭りんつき餅もここへんまじじ　４月になると『蒸し餅、タンサン餅』に衣替え。人間の着物もそろそろ春物に　干した物干し竿にも　色鮮やかさが入っち　心浮き浮きん春になった。

『もうへぇセリがあったんな』　季節は自然なゆうしたもん　忘れんじ巡り来るぬ　年寄りは逆らわんごつ守っち　春ん仕事を追いかけたり　追われたりん世の中でんある。

方言説明……３１Ｐ⇨スクイ…穀物を定量すくいこんで移動に使う農具。手ミイ…両手で穀物を入れて上下に動かしながら　風力利用の選別農具。サブル…選別する。中封…俵の真ん中を絞める方法。米を俵につめて中を縛る事で　移動に安定させる方法。この後四方に縄をかけて更に　４ヶ所縄で絞めるので俵の出来あがりは　美しい。その姿で小作に納めたり　供出に出した。イチアキ…一度使った俵。茶オキャネーガ…茶受けはない。

３２Ｐ⇨ヒビ…寒さで皮膚が痛んでいる。米価…一般的値段。

３３Ｐ⇨ヨリ…集会。ガイト…たくさん。

３４Ｐ⇨カマゲ…かます、穀物などをいれる藁で作った農具。ムシロ…藁で作った穀物を干す時に広げて使う農具。テレテレしよる…のんびりして。

３５Ｐ⇨ワクド…蛙。ハリコミよる…精出している。エバ…蜘蛛の網目に張った巣。ドーミー…風力で選別する木製手回し農具。ヨコウチ…休んで。、もうへぇ…そんなに早くから。

方言説明で難しい幾つかを　説明してありますが　方言には文章の場合　後先を続けて読むときには　おおよその意味が解る場合もあります。この際には省略して言う　などもありますが　いずれの場合でも中身には　ふと暖かな思いやりも　はいっているようです。テレテレシヨル…決して叱るのではない　同情している。早く気づいてくれたらと　そんな思いもあるのでは。もうへェ…嬉しそうに笑顔も感じられます。人の心の暖かさ豊かさが　だから生きられるのでしょう。

五子糖

脇儀作……安政年間《１８５５》文武両道の指導を　しよった。武芸の講義やらひ素読、習字。宝蔵院流槍術、新陰流剣術、扱心流体術、そりぃ居合術、砲術なんかもかてた全般じ　若いしたちん勉強ん機会が　明治ん始めまじ続いた。武芸はさらにそん流れを　引いた者によっち戦前、戦中まじ続いた。こんほかにも寺小屋式ん　学習機関があっち指導は　医師、僧侶、役人が暇ん時に　指導しよったき　当時にしちみりゃ恵まれちょつごたる。

読み書きソロバンだけじゃのうじ　人間のありかたも体得したしも多かった。そん中でんぐあゆぅ整ぅちょつた　都郁堂は文武両道じあったき　近郊だけじのうじ長ぇ歴史ん中じゃ　庄内、別府、大野、植田、なんかるん　生徒ん名前も多かった。教育機関の名声に途中にも　あったろうに施設を横目に　通う熱心さが羨ましいごたる。

熊谷磯馬、々直信、小野光喜……宇曾神社の庭じ訓練した人たちは昼ん仕事んすんだ後　あん山まじ上り習うち不屈ん精神と根性はたいしたもん。そん成果も大きかったんじゃろう。新陰んほか外物蝶落一巻にゃ、そん作法心得かる武芸ん事が書き記され　鵜戸大明神ん名前や祖神鹿取先生霊位、観世音菩薩、鞍馬山多門天張山坊、とあるき　宇曾山にまつられちょつた事も　解る。

小野光喜は戦中まじ指導しよったき　出征兵士ん護身法なんかも教えち　無事帰還した話しも伝わっちょる。熊谷磯馬ん家ん過去帳によりゃ『三破神仏流砲術神入写』⇨１８４９年とあるき１６０年ぐれ　昔物語でんあるが。入門誓約書にゃ他言すべからずち　特に入れちあるき　極秘ん極意書でんあったんじゃなかろうか。

昔かるん人材育成にゃ苦労が多かった　じゃが手をこまねいてん　出来た話じゃねぇき　早もんがちにもなるじゃろう。心ん中にそげな考えを持つ　そきー差がついちもくる。寺小屋もケックシャあったし　僧侶ん奥様が教えるそげな　美風もあったのん頼もしい限り。特に１８００年代になると　多くん指導者が先を競い教えたんも　地域ん活性化とんなり　地域性も顔が覗いちそん基本は　今でん地区内各地に見らるる。

そげな地区にゃいつも指導者が　継承もされち模範型も戦後まじ　残っちょつたな嬉しい事。今風ん高校まじゃヤレレン『ほんなせめて裁縫ぐれは』ち　お寺じ習う。女性の場合はそこじ社会勉強も出来たもんじゃ。自宅を開放しち教室にしたり　無料じ教えたりする事も　いっときハヤッチョツタ。

自分を守る事は家族を守る事でんある。それが飛躍すると里を集落を守る。厳しい時の暮らしの中じゃ　それが何よりん要でんあった。火事、病気、盗難、死去、どんひつとあげてん自分方だけじ出来ん事があるもん。心ん結びつき信頼がありゃ咄嗟ん時　『ご免いいかなぁ』『つまらん遠慮いらんで』じ一見落着事たりる。

『済まんけんどチョコット書いちくれん』　やえこしい書類なんか誰にでん　頼まれんもんじゃがそこが日ごろ往生。昔は文字が書けない人も多かったき　ついつい甘えるけんど　時代はそげな制度になっちょつた。貧富と言うか身分制度になんかが。それをうまく乗り越えたんが　まさに寺小屋であってんお寺ん奥様に習ってん身についた　知識能力は離れるもんじゃねぇき。

赤坂川ち言いよったんも　江戸期になっち参勤交代ん行列が　７つん瀬をわたる１の瀬渡しん側。じゃき区切りゆう『七瀬川』ち　つけたそうな。

小倉屋の人となり……江戸期の岡藩じゃつた今市に　小倉屋と言う長者があった。鎮守のお宮ん建物が傷んだもんじゃき　長老たちが相談しち長者に　相談に行くこちなった。『これこれしかじか』ち　話し出すのに気をもんじょつたか　しばらく考えちょつたら　『よし解ったでなんとかしましょう』　そりゃ承知したと言う意味じゃつた。

長者さんな『どげな門を作ろうか』ち　いっとき考えちょつたケンド　人ん噂じゃ時の偉い人は　日光に目も眩むような凄いお宮を作ったと聞いたき　江戸ん左甚五郎さんとこに　使いを出したところ弟子ん　大工をすぐ回しちくれました。来た大工さんに　『よう来てくれました　日光ん日暮らしの門のような素晴らしい門を　いろいろ彫り物も入れちもらいたい』　無理かん知れんが話しましたら　『しばらく考えさせち』と屋敷ん離れに引きこもんたんと。

心配と大丈夫しょわねぇ　そげな思いじ待つこと７日あまり奥から　顔覗かせた大工は『なんとか絵が出来たけん』　笑顔ん言葉に長者もほっとしました。

仕事がはかどっち大体ん　完成図が書かれたぬ見ると彫物にゃ　自分の暮らし振りをいっぱい　入れちもらいてぇち注文も話しました。大工さんも出来るだけ　希望も取り入れちおかしゅねぇようん　門がやんがち出来上がりました。日暮らし門に似たようじゃき　村人たちも『日暮らしん門』ち　呼ぶごつなりました。、

暮らし向きん絵にゃ畑仕事、食事、たけのこ堀、くわが折れた様子なんかもあっち　長者さんの身近かな人柄も　見ちょると解るごたる出来ばえに　やっぱ江戸ん大工は腕がいいのぅ。ちもう門を見あぐると　日が暮るるようじゃつた。

特に正面に彫った竜ん絵どま　本物そっくりに出来ちょるき見るしゃ　マバタキモせんじゃつたち言う。ところがそん竜があんまり素晴らしいもんじゃき　夜になると抜け出ち近所ん『田に水飲み行く』ち言う　噂が広まったんじゃこと。田んぼつくる人たちにしちみると　それじのうでん少ねぇ水が　竜に飲まるると稲が枯れちしまう。

そげな事がありだしたところ　長者さんも急に亡くなってしまったそうな。悲しい出来ごとにと広がっちしもうた。偶然とは言えあんまりにも　気のどくな流れになっちしもうた。あの長者さんな信心深い人でんあったに　彫り物にも中国の故事にある　親孝行に特に優れた人物　２４人の彫刻『２４孝』を彫らせち　村人の幸せも願ったとか。

『日暮しの門は今も　丸山神社の楼門』としち　今市地区ん人たちん鎮守の社としち　古杉に囲まれて当時の思い出を　心に知らせているごたる。

石だたみ道がすぐ石段の下かる　はじまる昔ん肥後街道ん西ん入口かる見上ぐると　先人が祈念しち作った建物に　風情を感じ遥か江戸を忍ぶ　人たちん心根が汲み取れそう。歴史に残した小倉屋はこの世になくても　優しい里思う気持ちは今も残された　里人たちの心の片隅にあって　言葉にださんでん心がきっと　感謝しながら遥か天国に　馳せちょるんじゃろう。

馬子の五助が竹田かる帰っち来たんか　馬子歌が聞こえちくる……アオょ勇めよ　宿場はそこじゃ　あれが街道ん石だたみ
　　ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ

宇曾に出ようか　荒木に行こうか　四辻峠の思案顔
　　ハ　七瀬のせせらぎ　小鮎がスイスイ　ホイホイホイ。

一華和尚は博学繊細

江戸時代初期の和尚じゃが　そりゃもう僧侶らしい博学じ人にも優しい　繊細さが人気もあっち　檀家んしかる信頼をされちょつた。殿様ん参勤交代があるき　使役に駆り出されるこちなり　どうしたことじゃろうか　和尚も役人が出るごつ言うち来た。おかしいたぁ思うたんじゃが　そこじ逆ねじこねてん仕方ねぇき出るこちした。

当たりくじが何と駕籠かきじゃつた。力はあるき苦にゃならんが　本当ん所じゃ神主、僧侶なんかは使役にゃせん。が当たり前じゃつたき　本心な納まらんが本音じゃつた。そん日駕籠が横道ん眺めんいい所り　さいかかった時じゅつた。

そげんこたぁチットン知らんもんじゃき　殿様に気を利かせち眺めちもろおぅち　休憩の合図したんじゃつた。天気もいいし『ひとよこい』は　そりゃもう乙なもんじ　宿ん久住にも早ぅ着く刻限でんあったき　ひとよこいするこちなった。一華和尚は『しめしめ丁度いいわい』　ニタリほくそ笑むと相棒に　『俺に任せちょきゃいいで』　『解った』

担ぎ棒を一人じ動かすと　片つろぅホキん端にグイと差し出し　『あーこりゃ眺めがいいで　見ちゃどうですか』ち一人ごつ言うたもんじゃき　殿様なんの気ものぅ戸をチット開けち見た。なんと駕籠んすぐ下はホキの端　『これこれこりやぁどうした事か』　そん声にタマガッタお付きん侍。

『これこれ駕籠かきアブネジャないか　早く駕籠を戻さにゃ』『まぁゆっくり見ち貰うんがいいじゃねぇ』　殿様も何か訳あり状態を察しち　とりあえず駕籠は元に位置になった。後で始末を聞いた挙句に顛末が　使役からん問題らしい。

久住ん宿じ理屈を聞いた殿様も　知らぬこととは言え理屈に合わん　役人の取扱いに厳しい呼び出し　以後絶対そげな倫理の取扱いはせんごつなった。雨降っち地固まるんたとえ。失敗は正してこす納得理解も　人ん心んわだかまりも　解けたそうな。後に尾を引かんごつする　采配も大事な事でんある。

屋根ん葺き替えにどしてん竹がほしい　檀家にむりじゃろうがち　『一荷よかろうか』ち頼んだら　『いいこす　お安いご用』ち気持ちゆうクルルこちなった。喜んだ和尚が次ん朝早ぅ行き　竹山じバサバサ切りはじめた。『一荷ぐれなら』ち甘くみちょつたら　まぁなんと同じ一荷でん『一荷よが違う』

たしがに『一荷ちゃ普通ひとくびり』じゃが　和尚ん一荷ん大きさはトテツモねぇ　大いいじゃき普通んしの　何十倍もん太さじ朝から切った竹山ん　大半の竹がバサッとノウナッチョッタ。檀家んしが起けち何か音がしよる　出ちみるとあたりゃ一山　竹がみな切られちょつたち言う。

そん頃子にゃもう和尚は　バシャバシャ竹をかたげち　寺に帰ったんじゃがそれかるは　和尚ん名前を『一荷和尚』とん呼ぶしもあったそうな。竹代はちゃんと後じ払うたち言うきそれはそれ　これはこれち律儀な面もあったそうな。すぐ屋根ん葺きかえもすんじ　お参りにくる檀家んしたちも　気持ちがすがすがしたことじゃろう。

後にこん寺は三国境に移るが　時代ん流れの中じ寺ん役割僧侶ん人望なんかは　人の上に立つ価値観のある人たちだけに檀家や　地区民も尊敬するし　信頼も寄せて指導者　相談相手として親しまれていたようだ。生まれた時も『三夜の待ち日』に　3年3月にして恵まれたとか。『三夜様ん行事も残されちょつた。

甲斐　肇の医療挑戦

東部小学校庭に紅白の鉢巻きをした　多くの人たちが荷車に乗せた　寿像をかけ声も高らかに　引いて動く様は喜びの流坪ん極み。長年の功績に今市　野津原両村民有志ん発起じ　今日はお祝の据えつけ祭り。ひた向きに地域ん医療に　献身したなによりのご褒美でんある。笑顔が我がことんごたる　世話になった気持ちん集大成。

長崎医大に勉強に行くに　今市かる熊本三角まじ歩き　船じ長崎にと苦難の青春時代。じゃが医業継承ん家じありゃ　責任も感じちょつんでんあろう。無事卒業すると父の後を　明治３４年卒業した彼は竹田中学じゃ　滝廉太郎とは１年後輩ん同窓じゃつた。２４歳卒業証書番号が６８番じゃき　１期か２期生かん知れん。

今市開業中ん祖父ん代に　大飢饉があっちこん救済に　大量ん銀を寄進して当時ん大名かる　褒賞を受けたち言う。大正んはじめに野津原本町に開業　野津原全域に診療えち発展した。当時の農家じゃ収入もままならんき　無理をする病気克服じゃつたが　往診依頼にゃすぐ自転車や馬が利用されよった。今でん馬繋ぎん木がある。

やんがち自動車を購入したが　第二次戦争じ燃料が制約されち元の線に逆もどり。戦後昭和２３年に『国民健康保険』制度になっち　患者も増え医療ん中核としち　活躍診療科目もひろがったき後継者夫人に　医学博士女性医師を娶り　親嫁コンビの診療に当時珍しく　若い女医先生に診ちもらおっと　訪れの患者も多かったごたる盛況に　思わずこげな仕事しちよかったち言う。

当時は専門医にかかる患者は　珍しかったが甲斐医院には院長が産科までに及ぶ　病科全般を幅広く手がける　名医として信望も厚く　その敏腕ぶりは多くから喜ばれた。健康こす幸せん原点じゃが。

『はい　済んだで　これじしょわなかろう』　優しい眼差しじ治療した後にゃニッコリ。患者にしちみりゃ　白衣の医者にこう言われると安堵するもん。『皆んなサカシイナ』『はいお影様じ　やっぱお医師さんが近えき　助かります』『医者よりゃ自分じ病気せんごつセニャナァ』　小首かしぐる。

慈愛に満ちたそん言葉んひとつ　ひとつにこの人となりん真心が伝わっちくるごたる。今市ん奥　練迫ん柿の木。そこで生まれちすぐ『後を継ごうち思うた』ち　少し暇の時にお聞きしたら　長年の疲れもあったに　『まぁ私ん天職じったんじゃな』『病気せんごつ』ち思う　気持ちは先走るとか。

昭和４０年１１月３日　６０余年にわたる『地域医療の貢献による』　生存者叙勲『勲５等双光旭日章』が授与された。この人生８９年には足りないかも　でも生涯この功績は語り伝えられて　寿像とともに地域住民の　誇りとなるんじゃなかろうか。言うは簡単じゃが　実行となりゃ難しいんが人生じゃろう。

生まれた練迫にゃ　古くからん直入文化が根強ぅ　守られちよっち盆踊りなんかも　賑やかかったそうな。若い頃にゃ向こうんしも踊りよる。こっちも負けんごつち言わるりゃ　時にゃ輪に入ったが『いつ病人が』ち　そん事が離れんのも宿命じゃったよう。練りとか丹生とか古い　化粧に関わるような地名。

『血の道』の妙薬ん広告看板が　懐かしいが名医の仄かな技が　そこにはあったのじゃろう。仁術とも言う医学に執念を燃やした生涯は交通機関の　発達があっても『もいっぺん歩いち長崎まじ』　そげな声が微かに聞こえるごたる　名医の面影は寿像の前に立つと囁きかけて　笑顔で聴診器を引き寄せるそん仕種がとてもよく似合う。

天覧馬を育てた吾一郎

戦後の昭和２４年６月８日　大分市入りした全国巡行途中の天皇陛下が　歓迎のお迎えん中に　特に名馬も招かれちょつた。『福隆号親子馬』は　吾一郎、タカ夫婦の丹精こめた名馬じ馬飼育にかけちゃ　負けん気ん執念が晴舞台に　結びちぃた訳じゃつた。生まれち間もねぇ頃にゃ　県の種畜久住分場に依頼しち保育。１８年にゃ畜産共進会じ　農林大臣賞ん栄誉としち金５０円も授与された。

本人もソ満国境に出征　体格ん有利さが活躍にも冴えたとかおっとりした優しい風体じゃが　芯はどうしてとてん激しい一面もあっち子供ん躾にゃそりゃもう　厳しい父親でんあったごたる。じゃきか笑顔の底に慈愛の心　水車ん荷取りに行くと『仏様んごたる』ち　皆んなかる好かれた好男子でんあった。

天皇は馬の鼻づらをそっと撫でられ　子馬ん初姫号の顔を鼻づらを　何べんも何べんも優しくたたかれて　別れを惜しむ姿が印象的じゃつたらしい。ご自分も軍馬に乗る機会が多かっただけに　馬に対する思いは人一倍強く　名馬の前では特別な思いでが胸に強い刺激もあったよう。

戦前は馬は軍馬としち徴用され　戦地で散華した馬も聞くがそんな　宿命にある馬の飼育には　精魂傾けていただけに　晴舞台にもう徴用ん心配がねぇ　時代の安堵でくる時代ん　巡幸途中の天覧の巡り合わせは　吾一郎、タカにしちみりゃもう勲章もんでんあった。

優秀な馬を持ったのも　天覧に巡り会うのも　この人たちん人となりんご褒美でんあろう。馬を大事にしちこれかるも　心通い合う生涯じいてほしい　思いが脳裏に浮かんじくるが。

馬にかかわらんじ牛でん　心が通じあうんは性格もゆうなるもん。軍馬じ戦地に行くともう　相手ん兵隊が一心同体になるき　泥がつくと自分な泥まみれでん　先に馬を洗い草をやっちそれかる　じぶんがん泥を落とし　残り物んでんいい食う。心たぁそげなもんじゃろう。

吾一郎さん頼まれ粉スリがでけたき　ちった遅ぅなったけんんど　提灯ぬ荷鞍にぶら下げち　出かけたもんの途中じ　曇った日でんあったが暗ぅなった。馬は夜目が効くが人間なサッパリ。馬ん尻ぅ離れんじ行くうち　もう真っ暗になっちしもぅた。『りゃりゃ困ったもんじゃが』ち　ひょいと思いでへた。

『じゃ俺は提灯ぬ持っちょつたんじゃ』　一人じてれ笑いしち灯すともう　足もとが明りいき……。えーと相手ん家に着くと火がツイチョラン。『おらんのかの　こきー置いちょきゃよかろう』と　そん時じゃつた。奥かる『あいたのー　あいたのー』　どうでん家ん中かるん　ウメキ声。

『おごめん　誰かおるんかえ』　奥かる声がする。『すまんな腹がせいち困っちょるんじゃ』『何え　ちょいと上がるで』馬をつなぐとそんまま　上がった。『りゃまぁ荷はおろさんじまぁ』　『済まんが薬がそこん棚に』『どこな　ここえ　これな』　薬箱かる引き出すと　急いじ渡すと水ぅ汲んじ来た。

。

『すまんじゃつたなぁ　一時すりゃ落ち着くじゃろうき』『ふがよかった　間にあうち　荷はこきー置くき　気をつけなぁえ』『済まんじゃつたなぁ』『誰でんあるわな』　思わん人助けしたごたる気持ちになった。帰り道『貧乏しちょつてんヤウチが皆んな　サカシカリャ　まぁいいか』　一人笑いしながら　吾一郎の人となりが　走馬灯んごつ浮かびあがった。

ハ　人ん世話すりゃいつかは回り　世話になる日もある世間ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ。

方言説明

３７Ｐ…そりー…それに。ごたる…そのようで。のうじ…なくて。ぐあゆう…ほどよく。なんかるん…などからの。とあるき…そのようにあるので。

３８Ｐ…ケックシャ…わりと。ヤレレン…通わせない。やられない。ハヤッチョツタ…流行していた。

３９Ｐ…どげな…どんな、どうですか。はかどっち…進んで。

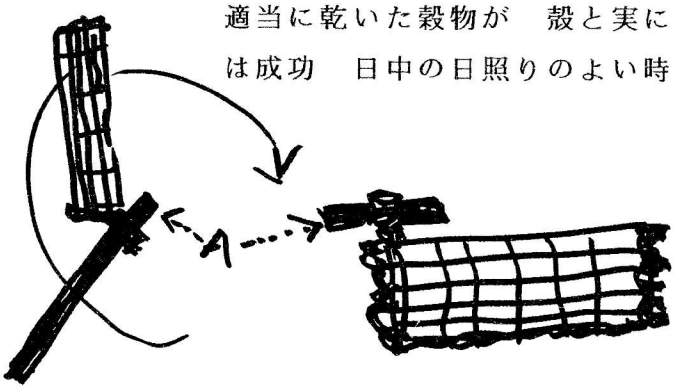
４０Ｐ…のうでん…なくても。

４１Ｐ…そこじ…そこで。さしかかったとき…通りあわせた時に。チット…少し。ひとよこい…ひとやすみ。カタツラホキジ…片側は崖になっていて。タマガッタ…吃驚した。アブネージャ…危険でおそろしく。

４２Ｐ…ノウナッチ…なくなって。

※※※　農具ん玉手箱　※※※

めぐり棒…穀類の脱穀する時い使う　回転式ん農具。かずらを使った長さ２メートル程んものを７，８本横並びにしち二つ折りにする。これも細い『かずら』で整え５ヶ所ほず編み合わせるが　折りまげた場所に横木を通し片方は回転しても抜けんごつ　出っぱりを作る。こきい２メートルほずん竹棒つける。反動じ回転するこち。振り回した平てぇ分が干し物ん上に来る時に持ち手をサグル。とパタンと穀物ぅ叩く仕組み。下図参照適当に乾いた穀物が　殻と実に分離する。ことじ作業は成功　日中の日照りのよい時は　効果があがる。



※※※　あせり棒　※※※

穀物を干すのん昔しゃ日乾し　天気に干すのが一番効率がゆうじ　そん為にゃヤーリ『あせりかやす』　それが効果をあぐる鍵でんあった。『あせり棒』が活躍する。稲刈り後ん脱穀したら籾干しが　どげぇゆうてん出来上がりゅ　左右する。土干しち言う土ん上にムシロ広げち干すんが　一番能率も出来上がりもいいき　まぁ年寄りん仕事でんあった。土干し…ドボシ。

大百姓はムシロも１００枚ぐれはあった　いっぺんアセリカヤスと　約１時間なかかるき　ちょいとヨコウともう　次んアセリカヤシになる。俄かどまふるともう大事　とりあえず二つ折被せち　すぐ壁なしに抱え込む。年寄りちゅうてん元気がいいもんじゃき　時に間に抱え込む。　俄か…通り雨。

けんど通り雨ちなりゃもう　えーと済んだち思うと晴になる。『んともう…はがいいやっちゃ』　年寄りが一人言いいながら入れたりだしたり　もう大事ん秋ん気まぐれ天気。に振り回さるる事も多いが朝ん天気をみち　そかぁそこ生活ん知恵も　ゆう働くもんじゃつた。

こげんふうじ年寄りも忙しい　昼飯ん茶わかしかる洗濯物干し子供ん世話やら　昼飯に帰らんじ野仕事が切りがつくと　籾も帰るきムシロボシガ　片隅に入っち今日コギ落とした　籾ん庭上げが暗ぅなるまじゴロゴロ　トウミサベがさるる。えーと夕飯はもう『だんごじる』　定ばんが喉歌ぅち通る。

横幅が１めーとるぐれん　長柄のちーた『アセリ棒』は　農具にゃならん活躍もする　ムシロに忠実に従う　平均道具多少ん空間が風や日光をくまのう　通るもんじゃき乾き上手にする。

47P…かずら…植物の帯状態に延びるもんで太いもんな丈夫な縄の代わりにもなる　強固さもあるが細いもんは細紐状にも。メグリ棒に使うもんな　太さが1かる2センチぐりのじ．乾くとそりゃぁ丈夫な強ささ。おまけに多少曲がっちょるき　適当ん隙間もあっち　殻と別れち分離したんな　具合ゆう散り落ちる。ごつぅ…そのように。サグル…さげる。

48P…ヤリ…よく。あせりかやす…前後に動かして天地を交替させて　表裏を交替させる。どげーゆうてん…何と言っても。そかあとごと…それはもう後の話になったが。それなりん動きじ…相応した動きで。庭あげ…コギ落とした稲を持ち帰って　選別器で風力選別する。田んぼでは遅くまでコギ落とすので　籾とゴミなどが入ったまま　暗くなって帰る事もあり庭先で　月明かりやカンテラ、チョウチンの明かりなどを　頼りに選別して次の日の　むしろ干しに備る作業。

※※※　つつろく　※※※

俵を編む時に使う小縄に　藁を挟んで交互に前後に動かして組上げる　道具の一種で　『行き来して共に役立つ』　事から人生のあり方　好誼の真髄にも触れる話題にも　引用される『つつろく人生』の　可愛いい農具の一つでもある。藁が生活にも大きな貢献　役割を果たしているが　稲を作ることで藁が副産物として残り　その藁を高度に利用する　農家の繊細な技は例えば　『俵』でも外回り、内蓋、俵事態も藁と縄が巧みなコンビネーションで　美しいスタイルになる気品が備わっている。

玉手箱ぅあけたら　先人と一緒にイノチキ欠かせん米俵ん話になっちしもうたき　ここじ馬子ん五助さんに　ちょいと俵ん話しゅしてもらおう。え『五助さんな　こんしゃなぁ一の瀬渡しの側ぇ居る人気者ん　馬子がナリワイじゃが　時にゃほかん仕事もするき　本当はなにか本人も知らんち言う。まぁなんでん出来る器用人　笑顔がひげ面かるゆう似合うし　腹をたんし頼まれぅ　断わるの好かんのと。

俵が出来るまじ…藁をすぐっち藁打ち槌じ軟らしゅ　しち1，2本ずつ取っち　小縄をなう。こん縄を利用しち藁を4，5本ずつ束ねち交互に　『つつろく』を前後に渡しちゃ編むんが　俵になる始めん仕事。両端ぅ閉じち二重に重ねたんが　俵ん本体になる。

外俵になったんぬ　角折りまげ内側に合わせち　口寄せすりゃ本体ん外が完成。内側分はチット回りがコンメーき　それに入れるこちなるが　そこに蓋をせんと米が漏ればき　蓋も藁じ上手に作る、短い藁を平らにならべると　足じ押さえち片隅かる回りながら　丸い蓋を作りあげる。これが蓋になるき桟俵　傘俵とん結う。《サンドーラ》　上蓋にもつくんが傘ん役目かる　傘俵⇨サンタワラ…サンドウラ。

米が入ったら上の蓋も口も閉め　縄で《口縄》をしめて封になる。ここで《4斗いり、60キロ入り》　横にすると中央を中封絞めする。しっかり絞めたらさらに左右に2本ずつ　縄絞めした後さらに縦に十文字　ホズミをかけて出来あがり。まさに高貴で品格のある俵になる。おまけに縄にも手じ　スリをいれひげ根は切取り　磨きあぐるまじする。

使った材料はすべて藁で　米が実ったその殻は全て表粧に使うと言う　一人舞台でもあるんで。じゃき腰かけどますりゃもう　割木じ叩かれたもんじゃつた。

△△△　方言説明　△△△

４３Ｐ　じゃが…ですが。大飢饉…天保３⇨７年に全国に飢饉が広まっている。やんがち…やがて。燃料節約…戦時下になって輸入が止まり　軍事に回す為に国民にはすべて節約　バスにも木炭利用の発生ガスで使用の有様時代。こげな…こんな。

４４Ｐ　これじしょわなかろう…こんな事で大丈夫でしょう。サカシイナ…元気ですか。セニャナァ…しなくてはなるまい。ごたる…そのようです。まじ…まで。

４５Ｐ　全国巡幸…戦後天皇が全国を回って　戦時中の苦労に対する慰問や　復旧の現況を見て回った。大分県の場合いは現在の文化会館の位置に県庁。細田徳寿知事。野津原村長は安部忠治。

４６Ｐ　やっち…食べさせて。サッパリ…とても駄目。おらんのか…不在ですか。

今回は『玉手箱』に　古い時代の　脇儀助、熊谷磯馬、それに熊谷直信、小野光喜。歴史にもとずく　小倉屋。ずっと新しくなって　甲斐肇、御手洗吾一郎。こんな皆さんの苦労と故郷の文化発展に貢献した　思い出の暦を繙きました。先人が故郷を愛し無言の教えを　受け継いで行きたいものです。

ハ　朝山帰りの積荷に揺るる　可愛い山ユリ誰のやら
ハ　七瀬のせせらぎ　小鮎がスイスイ　ホイホイホイ。

ハ　好きと言えない１９の暮れの　あれも年頃　身を焦がす
ハ　七瀬のせせらぎ　もみじがチラホラ　ホイホイホイ。

ハ　府内帰りの馬子唄聞けば　針を持つ手が又とまる
ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ……。

『故郷の玉手箱』にゃ　先人の功績やこぼれ話　知らな逸話なんかを　勿体ないので毎回数題　出場して頂き披露しています。歴史に残るものから　史実、伝承、民話、など多くの話題。をできるだけ　多くとりあげてその　ご苦労に対して感謝する気持ちからです。

野津原の歴史は約５万年とも，でもそれには根拠も必要です。しかしそこまでは無理でも　知ってほしいものは　多く取りあげて陽の光に　輝いていただく事が狙いです。先人の労苦が今の野津原の輝石でもあります。ささいな話でも近くでも　それが初めて聞く話題なら　それは皆んなで大事にする　価値もあると信じています。

肥後街道はかって江戸期間に　参勤交代道として使われ文化も　大きく入って来ました。冊子の続編１１号《平成２１年に発行分》から　５年に別けて分割で掲載しています。続いての往還街道は　冊子の１６号から《平成２６年発行分》から　５年に分割して平成２０年発行分まで　掲載して街道周辺の人、物、歴史、民話伝承、生活、などを取り入れています。

先人の積み上げた故郷を思い　愛した気持ちを知って頂くそれには夢とロマンも入っています。が人間の生活には夢がロマンが　あってこそ潤いもあると　信じています。多くの皆様に知って頂き『野津原のよさ』を　自慢して頂きたいものです。大分市の奥座敷の野津原　小さな地域でも香り漂う故郷。

ハ　ちょいと差し出すヒヤキを草に　二人並んで忍び食い
ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ……。

ハ　あん娘としごろ姉さんカブリ　いつか覚えた馬子唄を
ハ　七瀬のせせらぎ小鮎がスイスイ　ホイホイホイ……。

味

人間の本能は食べる、眠る、好きな事をする、が叶えられたらまず　幸せであろう。どん一つが叶わんでん　無性に腹がたったり　怒りとうもなっちくるもん。そん中じ『食べる』事ぁ　見る香ぐ、舌ざわり、味、食感、こげなもんがトトノゥチョルト　もう最高でんありゃしめーか。

地域、気温差、季節、にょつてん　変わるもんじゃが　古くかるん伝統的ん食べ物は　いつん世になってん　基本は変わらんじ受け継がれちょるんは　嬉しいもん。そん幾つかを並べちみた。

『酒粕汁』

野津原神社ん春祭りにゃ　恒例ん神楽が奉納さるる。神社ん神楽舎じゃつたこん神楽が　こん日に奉納さるると　各地に頼まれた神楽奉納が始まる。じゃき年明け一番の神楽殿じゃ　食事接待に『酒粕味噌汁』が　振る舞われち気合いが出たもんじゃつた。普通は滅多に飲まんこん　『粕汁』にゃチョロリ　酒ん成分も残っちょるき　お代りするしもあっち　次ん神楽は盛り上がりよったもんじゃ。

たまに手に入った酒粕は　自家用にも使い束の間ん　楽しい夕餉にもなっちそん香り　味がまこち風味がいいき　思わん『こりゃ何よりんご馳走どゃ』ち　オメス言うたもんじゃ。味噌汁、粕漬け物に使う　アブッチ食ぶるとオツな味。落語じゃねぇが3枚食うたき　『酔っぱらったで』。

瓜、なすび、なんかん粕漬けどま　思わん飯が食いこみ『飯泥棒』ち　オコラレタモンジャ。ジャケンド　うもう食うこたぁやっぱ馬力が出る元じゃな。

酒粕ぅコンモウちぎっち　水かる沸かしち好みによっちゃ適量ん砂糖甘みだしん　塩ヒトツマミじ『甘酒』が　チョイトんなかめ出来る。寒い時どまガイト嗜まん　そげんシドモにゃいい按配ん　飲みもんに早変わりする。麦ん世話やくする頃ん寒い　両手両足に頬かぶりした　鼻ん頭どま待っちょる。

魚くせー煮物にでん　ちっとモモグッチ入れち　煮るともうそん臭みも帳げし。なんか福よかな香りが　お代りまじ誘い出えちもくるる。麹菌がうまい具合に味ぅ　加勢しち出すもんじゃき　料理上手な娘でん　チョコット入れち炊くと　『お前ん料理にゃ奥の手があるのぅ』ち　人気がいい。

『寒かろう　よこいよ』　手招きしちくるるんは　顔馴染みん近所んおばさん。嫁に来ちこんかたゆう　気にかけちくれち相談にも　無心にも『いいで』ち　親んごつゆうしちくるる。そん声にまた甘えとうなる　『鍬ん土ぅ落としち』　言いよせん畝ん中ぅピラピラ飛ぶと　もう解っちょるんで。

『早ぅこっちかけよ』　いつもん笑顔が寒いからか　特別に優しゅう見えち家に帰ったような。『いっつもすみません』上がりくちに腰かくると　盆にゆらゆらついだ甘酒。仄かに香るんが寒さからか　若いのに鼻水を誘っち　頭ん手拭いを引きおろすと　せわしゅ拭いた。

一杯口に運んで舌を焼かんごつ　すすり込むとじっと目を閉じたそん中に里ん母が浮かぶ。『よかったのぅ　皆んなに心を寄せちもろうち　苦労してん幸せ者ど』　そげな言葉が聞こえちくるごたる。『そうで　ここんおばさんな　親の代わりにいつも　甘えさせちくるるんで』

『さぁひるまじ　まちっとハリコモウカ』『無理せんごつせにゃな』『はい』素直に頭さげち……にっこり笑う二人。

ふるさとの味　『ゆで餅』

茹でる物には野菜、餅、染色、なんかがあるけんど　沸かした湯を通した利用は　焼く事ん次に考えちぃた　人間の知恵じゃろう。先人がここに辿りちーたき　燃やす事かる始まる　食文化も広がったごたる。太陽は勿論のこと　水を利用し　木草を燃やしち水を沸かす。そきー茹でる、煮ることがはじまった。

小麦粉に適量ん塩、水を入れち練るんが生地ん始まり。固いもんかる耳たぶくらいん　柔らかさが使い前が多いごたる。ゆで餅もそん部類に入る。コネチちょこっと寝かすりゃ　塩と水と粉とが旨い具合に　通じ合うんか弾力もちーち　後ん仕事がまこちしやすい。

太さによっち適当に別けち　平とうすりゃそんまま　たぎり湯に入れてんいい。重さじ底に沈むが　中まじ煮えたならひとりでに　浮き上がるきユウしたもん。これじ『ゆで餅』が出来あがり。水洗いせんじキナ粉にまぶす。黒砂糖にまぶす。そんままでん素朴な味が楽しめる。

白砂糖敷いた皿にすぐ移すと　温もりじ砂糖が解けち　上品な砂糖まめしが出来上がる。

少しおいて水分が乾いた後　薄く焼くと風変わり餅。焼いた後の砂糖醤油をさらりとつけるんも　乙な味が楽しめる。黒蜜、蜂蜜をかけてホークで食べるんは　洋食気味ち何とん言えん味に。

味噌汁を作って細切りにした餅を　入れると『ホウチョウ汁』に。少し焦がしち入れるると『焼き餅汁』にもなる。目先をチット変えた手心は　おもちなしん気持ちが　楽しめる。米ん食い延ばしに考えちぃた　先人のアイデアでんあったごたる。

これに餡を入るりゃもう　上品な菓子にもなる。小豆餡それもこし餡なら　口当たりもいい。粒餡も素朴に味ぅ楽しめる。小豆ん変わりん　エンドウ、トーマメ、トイモ、何かも使えち　黒砂糖も乙な味に仕上がる。こん時ぁ具合ぅ包まんと　解けた砂糖が流れ出るき用心ぬ。

形も手のひらぐらいから　5センチ回り位まじ　好みによっち作るが　中身の餡によっちゃ　形態も変わるじゃろう。好みによっちゃ三角、四角、何かもユーモアがある。黒砂糖ん変わりにトイモ餡、タカナ餡、トイモでん平たく　切ったままなんかも時には楽しい　おやつになるんじゃ　なかろうか。

はじめかる　ダンゴ形、三角形、四角形、なんかを器用に又は形に　はめち作ると　仕上がりも面白ぅなる。

出来たゆで餅を　次の味によっち引き立つる。好みによっち味噌味、ゆず醤油、からし醤油、ゴマダレ、ニンニク醤油、蜂蜜だれ、きなこまぶし、なんかに味を添えりゃ　一層旨味が楽しめる。小麦粉の本当ん旨さは　個人差があるき　旨さを堪能するんが　一番幸せかん知れん。

分厚く作ったゆで餅に　砂糖まぶしたんを　『牛の舌』ち言いよったが　まさに牛ん舌んごつん舌ざわり。貧しかったしでん食べ方　呼び方を変えち　食べ呼ぶんなら　なんか食べたごたる気もするき　贅沢な気持ちになるごたる。それが心が豊かになる鍵かんしれんなぁ。

それにしてん作るしゃ　やえこちゃねぇき　火のはて熱いぬ堪えち作る苦労は　ちゃんと『済まんなぁ』ち　思う気持ちゅ忘んごつせんと　悪いきな。そすりゃ又作っち　くるること請合いじゃきな。

◇◇◇　方言説明　◇◇◇

５３Ｐ　どん…どうにも。怒りとうもなっちくる…怒りたくもなってくる。トトノウチョル…すべてがしっかりしているので心配ない。ありゃしめーか…もしかすればあるのでは。じゃつた…でした。じゃき…ですから。チョロリ…ほんのすこし。どや…などは。オメス…上手におだてて。

５４Ｐ　コンモウ…小さく、辛抱して。どま…では。モモグッチ…あたりまわして。よこいよ…やすみなさい。くるるんか…いただけるのですか。いいで…よいですよ。ゆらゆら…あふれるように。ハリコモウカ…頑張りましょうか。

５５Ｐ　あるけんど…あるのですが。かんがえちーた…考えがうかんだ。じゃろう…でしょう。ちーたき…ついたから。そきー…そに。コネチ…手で押しながら上手に混ぜ合わせる。まこち…まことに。ユウしたもん…うまい具合に出来たもの。せんじ…しなくても。ホーチョウ汁…地方によって呼び方が異なる。★　だんご汁…この場合はダンゴを伸ばして半分に裂いて入れる。おもちなし…おもてなし。

５６Ｐ　入るりゃもう…入れさえすればたちまちに。トーマメ…そらまめ。じゃろう…でしょう。なんかも…なども。なるんじゃ…なるのでは。はじめかる…はじめから。食べたごたる…たべたような。やえこちゃねぇ…大変な苦労しますから。火のはて…火の側で。ちゃんと…素直にきちんと。そすりゃ…そのようにすれば。※　．作る人は食べる人の気持ちを思って　だから作ってくれる人に感謝の気持ちで　忘れないことが美味しさを　さらに増すかもね。

精米所の粉引く機械

嫁ぐ日が近くなっち昼下がり　精米所に小麦粉ひきに来た娘。嬉しさと　不安も胸に機械の動く音を　じっと肌に感じよった。こん音ももう聞けない　何回もここに来ちゃ　遊ぅだりヤリオニしよっち　おいさんに怒られたりもした。けんどそれももうあとされんじゃろう　何か寂しい思いもする。

あんクモもエバを張りさげーち　餌ん飛びつくんを待つちょるが　あれじ幸せなんじゃろう。うっとぅは相手がきまっち　嫁によそにアルクが　本当ん幸せはなんじゃろうか。年頃になりゃぁ嫁いじよそん嫁になり　子供ぅ生んじそん子が又　よそに嫁に行く。あんクモどまどげーなんのか……。

『なにゅ考えちょるんか』　急に声がしたもんじゃき　振り向いたら　隣村んおいさん。『いんげ　ちょいとな』『近ごろアルクちゅうたのぅ　おめでとう』『おおきに……』　じっと見つめられたもんじゃき　顔になにかついちょつたか　無意識に顔ぅなでたら　粉が一筋頬を引いた。

『お前ぁコンメー時かる　ええらしかったが　今でもええらしいのぅ』『あげんことんどょ言うち』　思わず嬉しかったきか左手じ　そっと肩を叩いた。娘ん嬉しそうな顔に自分も嬉しゅなったけんど　やつぱちっと寂しかった。『あいち　肩がもげたど』　『ちゃーご免な』

ただそれだけん言葉んやりとり　懐かしい寂しいそげな心情が　駆け巡っち行くごたる。『長い間お世話になりました』『元気しちょらにゃの　近えんじゃき又　祭りにゃ帰らにゃの』『はいおおきに』『病気すんなや』『おじさんも元気じ　無理せんごつしてな』　二人の会話が機械の音に　時折消ゆるごたる精米所。

五月の昔ばなし

昭和１２年４月　朝日新聞社ん発刊３万号ん　記念に東京⇨ロンドンを結ぶ１５３５７キロを　４日間じ結ぶ神風号ん壮挙があった。前ん年ん１１年にゃ　大分市にトキハデパートが創業。じゃけんど１２年にゃ『日支事変が勃発』した。新聞社の緊急記事を出す時ゆう　号外を発行するが　そん時にゃ朝日新聞は　配達人が腰に鈴さげち『号外号外』ち　言いながら愛読者に配達　途中ん希望者にもくばった。荷揚町にあった販売所じゃ　本社が小倉じゃつたき急きょ印刷部屋じ組み込み　活字拾いしち印刷もした。こん頃活字を拾ったんを　組み込んで号外判に印刷　配達したが鉛の活字は使う度に溶かして『母形活字』に　流しては作っちょつた。

※　往還街道№２　五助街道物語にも新聞関係あり。

昭和１６年１２月８日にゃ　とうとう大東亜戦争に突入　戦火はアジア一帯に広がっちしもうた。１９年にゃ大分合同新聞《大分新聞と豊州新聞の合併》も　原村に疎開が決まっち　大分空襲もはじまっち戦場は　北んアリュウシャンかる　南はガダルカナルまじも。輸送手段にも犠牲が目を覆うごつ。

昭和２０年３月に

そげな危機攻防ん時　今市じ大きな火災が発生した。長井野かる出た火はみるみる　茅葺き屋根ん家を類焼　それでん八幡様は避けち　今市ん町筋を総なめしち　信玄曲がりじ　いいあんばいに止ったそうな。２時間あまり２８戸が全焼　春先じそれじのうでん水ん不便じゅゃつた場所　どげもならん逃げ場もなかったち。

一切を焼きつくしたき　そん日の食い物にも事欠く有様。救援の支援じえーと仮住まいじ　復旧に頑張ったち言う。食われるもんは何でん口にしち飢えを忍んだ。そしち８月にゃ敗戦　なんち言うかもう踏んだり蹴ったりん　難関に喘ぐ時間が容赦のぅ続いた。

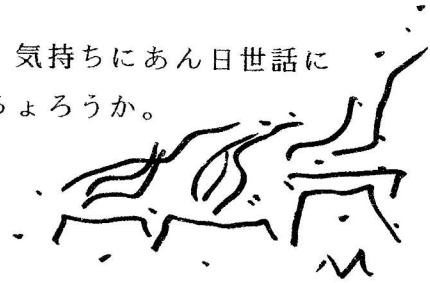
終戦になったけんど　火事ん後始末は家こす何とか　建てたもんの　生活基盤なそりゃもう　厳しい毎日がつづきよった。そん時期も間の悪い外地かるん　引き上げ者が火災など知らずに　親戚縁者を頼った寄り所に　何家族もが押しかけち来る。なんでここまでと思えてん　なりふりを見ると　ましてや義理の関わりとなると　むげに断われない辛さ。

そげな場面がここかしこに　飢えを忍ぶせめてもと　住まいはともかく焼けたフスボリ米でも　言われる情愛に甘えて受け取ると　忽ち夕餉の雑炊に衣変え。でもそりゃもう決して　上手にも『おいしい』とは言えない　味と香りにも生きる虫を　押さえる為には甘露の水　ご馳走の天国でもあった。

戦時下ん供出は農家にゃ　義務でんあったきアリシコ　それこす根こそぎ出しよったき　残り粒でんありゃせんじゃつた。畑は多ぅでは田は少ねぇし。そん畑でん肥料もねえし　出来る訳もねぇち言うと　色気ものうなるけんど　真剣な所はそうじゃつた。あれかる７０年　振り返っちみるとユウマァち　苦笑いしたり『あんたがおったかるこす　皆んなも生きられたんで』　そげえ言わるりゃ嬉しい気持ちが　今も湧いちくる。

今でんあん時ぁ本当に　そげな思いの気持ちが伝わるけんどなかにゃやっぱなぇ　人ん心たぁまぁ都合ゆう　そげ言うちゃ苦わらいするが　考えちみると『何回かイビラ餅じ辛抱したなえ』真実味を帯びちょるような　回顧話に目頭が熱ぅなる。石だたみに訪るる人たちが　『ゆうこん石だたみが　江戸期んままに』ちタマガルしもあるが　自分を犠牲にしちでん守り　大事にした心があるからかん。

高齢者になった世話をしたあん人たち　気持ちにあん日世話になった人たちは　今どげな思いじ過ごしちょろうか。



野津原の名前は　いつまでも続く

天暦９年《９５５》安部三郎良隆が　一の瀬川原の自家用地内に天満宮を創建　そん一帯を天神免ち呼ぶこつなった。こりゃ一村に一社の令によるが　家名が野津原じゃつた為　野津原三郎ち名乗り地名も　野津原ち呼ぶこつなった。そん名前も年月が流れち行くが　江戸期間も幕末かる近世も　ずっと呼ばれ合併も何回か　あったけんどそんたんび　『野津原』ん名前は残しち　大分市に合併した平成１７年も　そっくりそんまま『野津原』じ　今も続いちょる。

野原んごつ広い　津にゃ水に恵まるる　原は広々とした平地にそげな広大じ水がサラサラ　自然がいっぱいの夢が　ある故郷賛歌も聞こえるような　場所でんあるごたる。実際に野津原姓ん人も全国にいらっしゃるし　最近にもＮＨＫ大分放送局ん　放送記者としち勤務していた方もおられた。

合併しち大分市になった　平成１７年の『新大分市地名散歩』ん『野津原編』にゃ　大字野津原ん地名は約１３００年前に　生まれたち言わるる。広い場所じ水があり農地に適した　土地と言う意味のよう。江戸時代、地区は肥後領地じゃつた。参勤交代ルートに当っちょり　『お陣屋』もあった。野津原神社にゃ初代領主の　加藤清正も祭ってあり。夏の清正公まつりが催される。

平成１６年には大山車《ダシ》が　３５年振りに復活した。大分市とん合併じ『野津原町』は　無くなったが　大字の野津原はある。大字野津原を含めち全域の人々が　故郷ん地名を大事にし　発展させち来た先人に思いを　馳せち感謝しちょる。野津原地区には豊かな自然と暖かい人情が　今も濃ゆく残り新大分市の　奥座敷としち産業や観光を盛んにし　故郷を守って行きたいと言う。それが都心に近い地域の特性を生かした　将来ん展望ん輝きに　結びつけられるかが鍵でんある。

東は胡麻鶴　西は詰　サノ西は詰　東西３里の野津原村
ト　サイサイ　野津原村。

殿様時代の　野津原郷　サノ野津原郷　お茶屋の跡や城の馬場
ト　サイサイ　城の馬場。

春秋にぎわう　宇曾山　サノ宇曾山　霊験新たな虫封じ
ト　サイサイ　虫封じ。

胃腸によく効く　冷泉は　サノ冷泉は　湧いて尽きない塚野の地
ト　サイサイ　塚野の地

河鹿の声や　蛍かり　サノ蛍かり　流れも清き七瀬川
ト　サイサイ　七瀬川。

秋葉の山の　空高く　サノ空高く　功を語る忠魂碑
ト　サイサイ　忠魂碑。

広さも富も　人口も　サノ人口も　郡内一の野津原村
ト　サイサイ　野津原村。

郷土を愛せよ　村人よ　サノ村人よ　家業に精出しいそしめよ
ト　サイサイ　いそしめよ。

このほかにも地域の　シンボルを取り上げた　歌詞があったようですが　詳しい資料がなくて　残念です。戦後数年は婦人会が中心にらり　盆踊りに使われていた。曲は『紅屋の娘』の替え歌で　口説き調に声自慢の人が　歌ってリードスル　素朴な盆の夜の一時が　人の優しい心くばりで　過ぎて行きました。

野津原の県道舗装

当時の今市と野津原村が　合併したんが昭和３０年９月じゃつた。新しい野津原村になっち　大分かる温見に抜くる七瀬川ん　側に細長ぇ七瀬ん里　米を中心に森林資源の活用じ　おおかたが生活ん基盤じゃつた。が秋ん台風は一の瀬ん橋にも水害。翌年ん１月かる工事が始まった。折もおりに大蔵大臣に一万田さん。

工事は橋桁がタマガルゴツ　大けなコンクリートづくり　潜水夫が中で川底から砂利を堀り　機械が引き上げち橋桁を　沈むる工法。図面通りに進んで基盤が出来る。やがて見事な橋の完成　一万田蔵相も１０月３０日帰県　東部小学校じ歓迎会があった。１１月２０日にゃ完成しち１２月５日に落成式。１８日にゃ大相撲野津原場所が　東部小学校じあり初の相撲見物者もおおかった。力士はかく家に分宿しちょつた。

このジブンに防塵舗装がされち　砂利道が面目を一新したが　やっぱ本舗装ん夢は消えんじ　３２年１０月かるは　本町通り３００メートルが《７Ｍ幅》完成　工事費２８０万円《地元３０万負担》。引き続いち新町ん工事も　４００Ｍん予定が決まった。こん年にゃ村庁舎も完成落成式があり　工藤清彦村長、小野寿生助役。

やんがち恵良地区からも　舗装が進んじ新町まじ連なった。引き続いち一ノ瀬坂を上り　竹の内と順次舗装されち　埃りんたたん道が大分かる入っち来た。雨んたんび水を流すたみ　道路にさざ波状ん水はけが出来ち　バスに乗っちょるとまるで　洗たく板ん上を通るごたる　振動がしよった。

そうこうしよるうちぃ　トレラーバスが入っち来る。反転に苦労しよったがそかぁもうプロ　慣るるとあっと思う間に　バックオーライん車掌ん笛ん合図に　てきぱきと反転した長い車体。２人車掌のリボンも可愛いい　あん娘たちももうういい年頃じゃろう。

●●●　方言説明　●●●

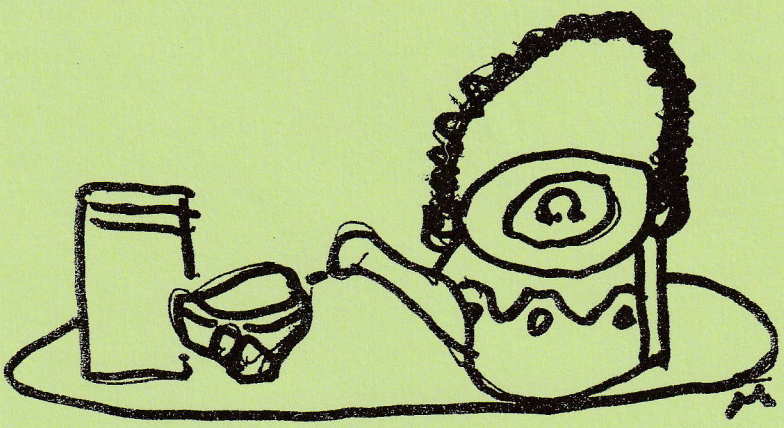
５９Ｐ　じゃつたき…ですから。しもぅた…しまった。それじのうでん…それでなくても。どげも…どうにも。

６０Ｐ　踏んだり蹴ったり…踏まれたり蹴られるような仕打ちにも。フスボリ米…火にあおられた煙りにイブサレタ匂いのする米⇨苦くてとても。ユウマァ…よくもまぁ。かるこす…だからこそ　だったので。イビラ餅…草の球根を水で晒して取ったデンプンで作った餅。

６３Ｐ　おおかたが…ほとんどの。一万田さん…一万田尚人さんでその前は　長く日銀総裁をしていた。タマガルゴツ…吃驚するように。川底から砂利を…掘っては機械ですくいあげて　その空間に重みで橋桁が下がる工法　一定の場所までさがったら　砂利を取った空間にコンクリートを　つめて固定した橋桁が完成する。ジブン…時間的な。防塵舗装…簡単な舗装で整地した後にコールタール液を散布して小砂を撒いて固める簡易舗装。やんがち…やがて。さざ波状…さざ波のように間隔を取った水はけの手法。洗たく板…昔の洗たくに使う木製の横波が入った板。そうこうしよるうち…しばらくしている間に。トレラーバス…運転席と乗客の部屋が異なる長いバスで　車掌が２人乗っている。右折左折や反転に広い場所が必要で　難易度の少ない野津原に運行したようで　電気バスも入ったが鶴崎方面に利用。そかぁもう…そんな場合はもう知り尽くした　慣れた人が。

リヤエンジンが付いたバスも　この頃から入りだして今までの『ボンネットバス』と　交替する時代になって行く。ガソリン不足時代、木炭バス時代、トレラーバス、電気バスと歴史は急転して行く。

民話伝承



『荷がおれた』

荷をおろした　荷物を卸すなんかに　ゆう使う作業言葉じゃが農家が　労働に使う時やら　相手を気使う時に　愛情もこめち使うもんじゃき　『物事が万事すんだ　終わった』ち　安心するような時に使うんが　ゆう似合うもんでんある。文字にしちみりゃ意味も　解るごたるが　言葉だけ聞くと　複雑にも取るる。

馬や牛ん背中に乗せち　帰っち来たときぃ　『帰っな　ヒドカッタナ』　ソン言葉が聞こえちょつてん　真っ先に馬や牛ん背中ん　荷を下ろすんが先じゃ。ち言葉にゃ言わんでん　通じ合うき不思議なもん。手早ぅ鞍かる外す　荷を下ろす。子どもが『荷がおれた』ち　心じ言うと　親も一安心なごたる。

ヒドカッタナ…疲れたでしょう　ご苦労様。荷がおれた…子どもでも無意識に言う優しい言葉。ごたる…ような心休まる。

お産が軽くて楽に生まれたそうで　近所んしたちもソリュ聞くと　『ふんとな　産が軽かったんな　よかったなぇ　ゆう働きよったき』ち　日ごろ目についちょる　働く姿がこん人ん評価にも連なる。そしち自分がん事んように　喜ぶ。お産な女性にしちみりゃ大変な事でんあるき　ほっとするんもゆう解る。

『無事生まれたち　荷がおれたなぁ』　喜びん言葉に代弁するお祝言葉でんある。をお陰じなぇふんと』　後は涙声にもなる婿じょうにしちみりゃ　話に聞いちょつてん　初めてん事でんあっち　そわそわ落ち着かんじゃつたが　無事生まれた時ん喜びぁやっぱ　そんしじゃねえと　解らんかん知れんもんじゃ。

ソリュ…それを。ふんとな…そうですか。働きよったき…働いていたから。ついちょる…気がついているから。して…すれば。

．するんも…するのも。そんしじゃねぇと…その人でないと。

冬ん仕事ん少ねぇ時に　一年分の薪物ぅ取り込むんが　男どもん仕事ん一つでんあった。普通６００ぱ　少のぅでん３５０ぱは使うき　山ん掃除を兼ねち取り込む。クビルなぁ竹縄じゃき　皆燃料にもなる。片つらかる掃除と薪とりとが　ハカドルと山も美しゅなり　薪小屋にゃ青い葉がちーた　新しい薪が宝ん山。

嫁ご話が始まると　真っ先見るんか薪小屋ち　ゆう言いよったた。『あっかぁ薪もんも山ぉやっちょるど』　これじ話も決まるこちなったんもある。それだけ精出す家内ぐみが　家内が円満な証でんあった。反対に病人があったりすると　仕事も順調に行かんき　冬仕事ん薪とりも事欠く有様。

薪小屋の空いた場所にゃ　秋の取り入れ後そんままになった農具がかたずけせんまま　隙間風に曝されちょる。侘しい風景でんある。自分の家のが見通しゆう　終わると近所んしも　手を出しち加勢はするもんの　やっぱ加勢するしも　多少は遠慮もしち気心んわかったしが　そっと聞いちみてタイミングも　合わせた。

クビル…束ねる。竹縄…女竹を二つに裂いて利用する縄の代理で　結構締まり枯れても丈夫で　末は燃料になる。ハカドル…能率があがる。ちいた…ついた。やっちょる…山のように見事。するもんの…加勢はするがやはり気を使うもので　押しかけ情けを好まない人だってあるから。

病人のある家の薪とりも　近所したちん加勢じ　一年分の薪も積み上げられた。『皆すまんじゃつたなぁ』『これじ荷がおれたな　病人も早ぅようなるわな』『おおきにおおきに』　心の荷も下りた思いに今年は　いい年になる事じゃろう。悪い時ばかりじゃねぇんが人生じゃき　お天とう様はツイチマワルキ。

畑の石垣がクズレチ　ツクロイを頼んだところ　ちょうど忙しい仕事が重なったち　日延べを言うち来た。急ぐけんど気軽に引き受けちくるる　そんしをサテオイチ　他の人に頼むんも気がひくる。もんじゃき我慢しち　待つちょつたが大雨じそんクズレが　ちっと大きぅなっちしもうた。

『ほら見よそう　俺がシチャルチ言うに』　折角言うちくれたしが　こそこそ話じそげなこつう言う。そん時ぁそれも一利あるたぁ思うたが　人間そげー自分の都合じ　天気者んごついっぺん頼んだに　都合ゆう他に頼むのもな　暫く待つこちしちょうた。

そうこうしよったらえーと　そんしん仕事が切りがちーたき　『明日かるかかるきイイジャロウカ』　待っちょつちよかったち思うた。相手もやっぱ気にかけち　心配しながら他ん仕事ん　区切りをしたかったんじゃろう。『いいぐれか』人間ここが　心ん別れ目かん知れん。

遅れた分まじ人手を集めち　遅れた分ち少し安くもしち。予定より半分の早さじ見事に　仕上がりができた。『遅ぅなっち済まんじゅやつたなえ　でんあそこも私がいいち　言うちくるるきな。あんた方にゃ申しわけなかったが　先にさせちもろうたんで。近いうちお喜びもあるそうじ』

そこまじ聞くと　『やっぱ先にさせちあげちよかった』ち家内じ　喜んだそん宵の口じゃつた。見知らぬ人が立っちょる。『どなたでしょうか』『実はお宅ん仕事を　後回しにしち都合してくれた　家の者です』　すべてが理解しあう時人の心の豊かさはいかに　大きく素晴らしいもんか。『でしたんな　いいえあくまり詳しゅ言わんけんど　理屈があるんじゃろうちまぁ』『ありがとうございます　お礼の印で』

クズレチ…壊れて。ツクロイ…補修。けんど…けれど。そんしを…その人を。サテオイテ…むげに断わって。もんじゃき…ものですから。ほら見よそう…そら見たか解ったか。シチャルチ…してあげよう。一利…一応理由は成り立つが。天気者…心変わり。しちょつた…していた。

そうこうしよったら…そうしている間に。かかるき…はじめるので。イイジャロウカ…よいでしょうか。かったんじゃろう…したかったのでしょう。いいぐれた…結構ですとも。分まじ…余分に。安くもしち…値引きもして。じゃつたなえ…でしたご免なさい。でん…でも。わたしがいいち…私がよいからと。お喜びも…お祝い事の予定で。そこまじ…そこまで知っていたのなら。

理屈が…何かの理由があったのでしょうから。お礼の印で…きっと幸先のよいお祝の心くばりか。

『えーと荷がおれたのぅ　相手ん人も喜んじくれたんか』　そりゃもう　喜んじくれたきな』　ツボサキが美しゅなっち　植木も品ゆう見ゆうごたるのぅ。見よ『世の中ゆうしち渡りゃ　味方を皆んなしちくるるもんじゃ　ありがたい事じゃのう』　この家んしも『荷がおれたごたる喜び』　譲った家んしも喜びん　お裾わけん嬉しい夕餉。

『荷が下りた』たぁ　荷物を下ろすごと　肩の重さが軽くなっち　体も心も楽になる。そんな心情を言葉にすれば『荷がおりた』ち　表現するんじゃろうな。そん奥には影には　安堵感、安心喜び、感謝、などさまざまに　人それぞれに感じ取れる　言葉の先人が作り出した　使い道かん知れんち思う。単なる馬牛の荷を下ろす事でも　その心の中にゃ優しさ　情愛があればこそ　こん『荷が下りた』が　生きているんかん知れない。

馬子ん五助さんが府内かる　笑顔ゆう戻っち来た。『何かいい事どまあったんじゃな』『まぁな』　決まり言葉がこん人ん優しいところ。帰り道じ知りべんしが　『苦にしよった屋根替えが済んだき　にがおれた』ち言いよった。『わしも茅を頼まれちょつたき　気になっちょつたが』　ここでん荷がおれたが　出ち来たもんじゃき　まぁ。

物事ん区切り、無事済んだ安心、大きなものが納まった。こげな意味が含まれちょるき　聞いた相手も一緒に安心しち喜ぶ。そげな人間関係ん情愛が　行き来するんじゃろう。

年ぅ感じさせせんごたる　バアサンが大けな鎌と　蝙蝠傘を横かるいにしちダッタンカ　橋ん側じ腰ぅおろしち　ヨコイヨル。『アリャーマァ　はりこむなぁまた根ざらいかえ』『そうで　暇暇にせんと一遍にゃ　ヨダキイキ』　山に苗を植えこんだら１０年ぐれは　根元ん草きりぅせんと　苗が草に押さえられち　枯るることがある。

まぁな…そんなところです。知りべんしが…知っている人が。しよった…していた。ちょつたき…いたので。ここでん…ここでも。もんじゃき…もんですから。まぁ…話の流れで気持ちが通じ合う。ごたる…ような。バアサン…高齢の女性。ダッタンカ…疲れたのか。ヨコイヨル…休憩している。アリャマァ…吃驚したように。はりこむ…精出す。ヨダキイキ…疲れて嫌になるから。ぐれは…くらいは。せんと…しないと。

この老婆が区切りがついたなら　『すんじ荷かおれた』ち話すことじゃろう。荷の字が当てはまるかは　問題じゃろうが　肩の重みが軽くなった。そんな意味であるなら『荷』の字がまさに　適訳な文字でんありそうな　そげな気もする。

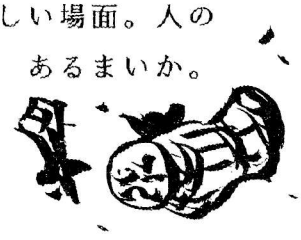
根ざらい…根元の草を切り払う。それじ苗の太りも早ぅなっち　骨折った苦労がやんがち　報いられるこちーなるもん。『根ざらいかえ』　言葉じゃ解り難いが　農村じ聞く時ん『根ざらい』は　下狩りを意味するよう。溝さらえ…排水溝をさらえて流れを　よくする意味。ゴミざらえ…ゴミなどの積み重ねたものを　清掃する時の呼称でんある。

『おっとろしゅ早ぇなぁ』『もう小作米を納めち来た』荷車にクビリツケタ包み　どうやら地主さんからん　ご褒美かん知れん。『お前かたはいつも　決まった日に納めちくるるし　俵を美ししゅしちゃる』　当たり前んことでん　個性もあっちキチントする　あらましな性格。それは悪げはねぇんじゃろうが。そこに人ん心ぅ動かす　愛情が開花もする。

『作らせちもらいよるに当たり前で』『作ってもらう嬉しいお礼』　作る人があるから荒れず　作もゆうできる。判断の仕方がそん土地も高度に役立つ。『荷がおれたな　地主さんが内緒でち晒木綿一反』『よかったなぁ』『こりゃ内緒じゃきな』『解っちょるき心配せんでん……』

おっとろしゅ…大変早くに。小作米…地主に土地の借り賃を米で納める。かたは…貴方の家は。しちゃる…してある。あらましな…粗雑な。悪げ…性格の差。ねえんじゃろうが…ないのでしょうが。作らせち…世話になって。作ってもらう…仕事をしてもらう。晒木綿一反…古くは衣類の利用価値がある素材。内緒…特別な心のご褒美。心配せんでん…心配しなくても他人には口外しないので。

同じ荷が下りたにしても　こんな微笑ましい場面に浮き彫りされる　『荷が下りた』は　見ても聞いても嬉しい場面。人の真心が相手に通じる時　苦痛も激変するのでは　あるまいか。



正月あれこれ…五助さんの『こぼればなし』

元旦…新しい年があくりゃ　『新年なおめでとうございます』　決まりきった一般的な挨拶　じゃが入念な年寄りしにゃ『こりゃまぁ　明けましておめでとうございます　どげなサカシカッタな』『はい　お影じな』　ここじ言うサカシカッタなは　相手ん健康をまず　気使うことかる今年がはじまる。

親しい近所ん家にゃ　おおかた歳順に挨拶まわり。一回りするカタワラ　氏神様に初詣でしち　今年ん無病息災を願うこちから。井戸の水を汲み供えるんも　おやじん務め。

２日…子どもは書き初め　山に行く人たちぁ　山に入る前に山の神に今年ん　無事故を願う。仕事はせんけんど　山にある草花や赤実のナンテンを切つち持ち帰り供える。凧揚げコマ回す男ん子。羽根つき毬つきは女ん子。正月歩きん人たちも多ぅなっち　正月料理も箸が進む。

一昔前までは　農家じゃ米すりん最盛期じ　時折舞う小雪を火鉢の暖を取りながら　石油発動機が早朝かる　忙しゅ音響かせち　次々と新しい米俵が　積み上がっちゆく。

若い男手がヒョイト担ぐと　クワエたばこんゆう似合う　歳よりん笑顔が『頼もしいのう』ち　自慢したげな風情。

７日正月…嫁さんたちが　正月客も一段落したき　息抜きに里に出かくる頃。七草粥を皆んなじ食べち　今年も達者な生活を密かに願う。『ほんな行っちくるき』『ゆっくりすりゃいいわな』　土産荷物も足取りも軽い。家によっちゃ昨年嫁いだ娘が　婿と大けな鏡餅と鮭の塩物土産に　ニコニコ顔じ帰った。

年寄りたちが　揃っち入湯に行くのん　こん頃になるがまだまだ　色つやんいいチット　腰は曲がったが　入湯とんなりゃ元気も出るもん。話が弾んじ極楽極楽。

１０日正月…鏡開きとん言うが　こん頃になりゃ鏡餅なんか
もさげる。固ぅなったのんあるき　水につけた
水餅にしたりする。はっきり区切っちする家は　年寄りなん
かがありゃこす　出来るもんじゃが仕事が多く　雑多な事も
多いだけに額面通りに　行くんは至難の技でんある。

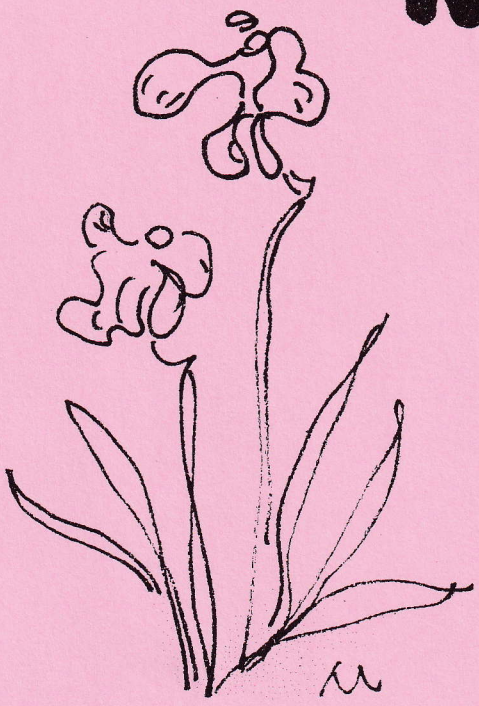
１５日正月…正月気分も薄れる頃じゃが　山仕事とん関わり
んある人たちん　山の神まつりも　この頃にあ
り１５日や１６日に　神事んあと無事故を祈った　行事の後
山の豊作を祈願する。農村じゃこげな素朴な　風習を大事に
継承しち　生活の安全無事故を　一年間過ごせるよう願う。

２０日正月…正月行事も最後の区切り　多くの区切りも元は
農家の人たちの　仕事と休みの機会を作った
神仏のご褒美かん知れない。正月気分から脱皮して　いよい
よ本格的な　春の仕事に移行するが　この歳も豊年満作であ
りたいものだ。小餅にしてあった　丸い餅もゆう乾いたき
保存食としち格納しちょきゃ　咄嗟ん時に食べらるるんも
先人の生活かる　にじみ出た知恵じゃろう。

旧正月…毎年月遅れん正月じゃが　農家ん仕事は季節に　よ
っち進めらるるき　旧正月が理想的でんあった。今
は新暦一本化じ　正月も新暦じゃけんど　漁師でも潮の満ち
干による　仕事ん関わりじ　そん風習も大事にされよる。さ
てこん旧正月は　農家にゃやっぱ新米を　地主に納める小作
米の納め込み。それでやっと一年の　締めくくりとなった。

五助さんの物知りも　たいしたもんじゃが　そげな生活環
境が日本じゃゆう似合うき　それはそれなりん『よさ』も
あるんは嬉しい限りでんある。そこに幸せな心豊かな　生活
も約束さるるんじゃろう。

五助の街道物語



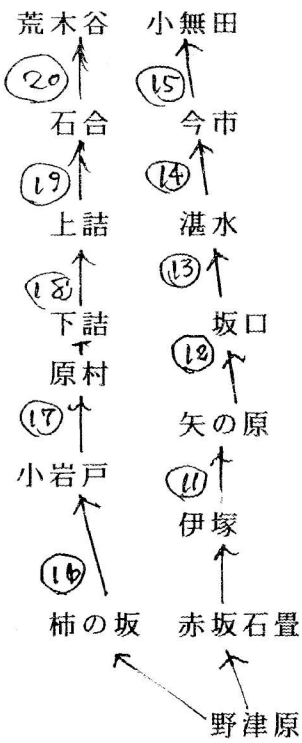
五助往還街道物語り《２》

肥後街道から離れち　前回かるは表ん往還街道を　馬子ん五助さんが軽快な語りじ　旅ん人と連れのうちょる。野津原かるん軽い荷物に馬んアオも　気もそぞろん風体。小岩戸橋ぅ越えちへぇもう　原村に入った。全国測量をした　伊能忠敬も１８１４年にこの辺も測量。宿野津原ん熊本客屋に泊まっちょる。

部下にゃ厳しい決まりもあっち　『借金、収賄、女遊びはしな、い』ち　誓約書を取ったそうな。新しい熊本を結ぶ県道をち希望が多かったもんじゃき　こんげさね道ぅ開けるぁ　難工事もあったがデーラもあっち　時の間に荷馬車どま走りでーた。明治１２年かる１４年にかけち　そん後１７年かる１９年にかけち　拡幅工事によっち全線が　荷馬車もスイスイ通るこちなった。そしち小岩戸橋も『石積みアーチ橋』に　完成した。明治３６年じゃつたが　荷馬車は温見かる野津原経由ん大分行きが　幅を効かせち五助さんどまちっと　荷が少のぅなった。

積みに揃うたか　雨具はいらん今日も天気の府内行き　ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラホイホイホイ　なんとまぁ声が響いち畑仕事ん娘が　背伸びするんを見ると　こん前ん話じゃ『どこかいいしが居るがのぅ』ち　言われた事がチット気にもなる。

若いたぁいいもんじゃ　元にゃ戻れん年が恨めしゅもある。



このへんな電気も早かった。大正８年《１９１９》に辻原ん　高崎菅太郎たちが発起　だんだん広がっち１０年にゃ諏訪村全域に明るい電気がトボレタ。道路もはじめは雨川かる戸黒にち　でんいつんまにか表を進んだ。才能が時としち頑張ったんかん知れん。

白山権現雨請いすれば　西の鶴山雲がたつ　ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ。日照りが続くと水不足が目立つ。権現様に祈願した護摩焚き行事は　見事に味方しちくれち鶴山んほうに　雲が出たち思うと小粒ん雨。ママゴト遊びん子供たちが　慌てちゴザを引きずりこむとーそん途端にガラガラ　ピカリ　夕立雨がザー。

それでんここらんしゃ　やっぱ辛抱頑張っちょるきか不思議と百姓一揆なんかなかった。やっぱ肥後領主ん施政ん効果か。才能だけじゃのうじ　人間を大事にする優しさと　常に目線を庶民におく　そげな人となりがいい結果にも　なったんじゃあるめーか。

指導者ん問題もあるじゃろう　民度も考え方の理念も秀でちょるんか古くから　文化も開けちょつた。芸能でん若い人たちん舞台芸能が　集落の人たちに潤いをもたらす。近時にゃ組合《現在の農協》があっち　職員ぬ技術者をそろえちょつた。仕入れを直接本社と折衝　安値じ組合員に利用しちもらう。

いち早く防犯灯設置する　組合の放送塔は周知連絡に効果を発揮しちバスん到着予告まじ。サイレンが着くと昼は１１時の予告じ　仕事ん区切りが至便じゃつた。出産にすぐ祝に駆けつけ定期貯金を勧める。連帯感が経済効果にも　お互いん幸せ造にも　常に取り組んじょつた。

若い者たちの頑張り

賀来の市が始まる前にゃ　善神様に旗を立てち迎える。耳が遠かったことかる聞き違ち　本殿に１４日間務め　後ぁ自分かてぇ居るぬ　反対に聞いたそうな。それじ本殿からん『お下り行列』が　９月に入るとあっち周辺大分郡な旗立てしよった。青年団なこん日が楽しみ　ニワトリ飯にドブロクが　ご褒美でんあったきな。

若い嫁さんがコボクレかかった　石けんぬ大事こうじ使うのん経済も考えたんもあるが　舅にゃ言われん婿が気を利かせにゃ。そきーいくと地下水ん出口じゃ　ホホラヌキー水が惜しげもねぇ出よる。人呼んじ『洗たく学校』ち言うだけあっち　あさまん一時ゃ賑やけぇこつ。『あんた大けな石けん』　恨めしそうに見る隣嫁『使いよ』『いいんな』　嬉しい気配りにゃ涙も誘う。

昔ん青年の芝居に修行かる帰りの　肥後ん人が行くとき世話になった家に　お礼に立ち寄った。見送った娘も年頃それに　淡い恋心も燃えちょつた。　★『里の芽ぶき花』……

心揺らした　あの人と
添えぬ仲とは　知りながら
過ぎる月日が　恨めしく
今宵も濡らす　夢枕

加茂の身に染む　水よりも　　巡り合わせは　故郷に
深い情けを　受けて来た　　待てば仄かな　芽ぶき花
親娘無事かと　合わす手に　　耐えた運命に　こみあげる
照らす夜更けの　月明かり　　瀬音嬉しや　七瀬川。

冷てぇ朝どまいつまでん　手をつけちょりてぇが　昼までん仕事が待っちょる。寒い日は山仕事は薪とり　ちっと霜が解くりゃ昼から　田畑ん鍬仕事じヅウコシが痛む。がこれも巡り合わせ。

『こいさかる寒行がはじまるで』　寺ん住職が素足じ鈴を鳴らしながら　門口じ経を唱えち順に回る。時にゃ粉雪がふる日もある。が　暗ぅなると提灯が明かりチラホラと。お大師様をまつった家じゃ　近所んしも集まっち『千願心経』を　あぐるしもあった。子供もヤトワレチ仲間に入ると　人並みあげきるき　喜ばれた。

石炭箱を机に勉強しよる１年生　ハナ、ハト、マメ、マス。粗末な教科書じゃつたが　おさがりも使われた時代。学用品でんこれじゃき　服も帽子もオサガリが当たり前。石版に石筆じ書いた答えが出来たら　赤丸が入っちソンママ消すまいち　大事コウジ抱えち帰ったもんじゃつた。

青年団が中心になっち盆踊り　初盆の家に揃ぅち集まり　ツボ先に輪を作っち口説き踊り。いっとき踊ると家んしがシコシタ　茶オケニ『ヤセウマ、サケモチ』、ちよこっと『ドブザケ』も　出されち　こんだチョロリ足取りん踊りが弾む。ほかにもある晩な移動したり　ここだけん時にゃ夜更けまじ続いた。

春先ん敬老会にゃ青年が　狂言ぬするけんどこれが　なかなかどしち垢ぬけちょる。場所ん雰囲気にぐあゆ合わせち　特定ん人んいい所ぅ持ち上ぐると　『あらまぁご祝儀も出た』と　なっち爆発する会場に　こんだ年寄りしも浮かれちしまう。顔ん皺が伸びながら若がえると　昔好きじゃつたんか　こそっと側に寄り添う無邪気な場面展開も。

南新四国８８ヶ所霊場巡拝記念碑が　あつち春先に無事終わるとここじ　護摩焚き行があっち　供養祭りや施我鬼供養もあった。里ん営みは濃げな風に四季の　景観とともに移り行く絵のごたる。そげな人ん行き来ん中じ　病気怪我事故んねぇごつ　祈り念じた神仏とん結びつき絆も強かった。お伊勢松、清正公祭り、祇園様祭り、祖母さんまつり、お大師様回りなんかも。

７３Ｐ　のうちょる…している。そぞん風体…のんきな。こんげさね…こちらの方に。デーラ…平坦な。どま…などは。いらん…不要。馬子唄が入る…地元の馬子が唄う馬子唄で　地区内各地が取り入れられて７７編ある。

７４Ｐ　トボレタ…明かりがついた。いつんまにか…知らぬ間に。護摩焚き…雨請いの願いをこめて祈願する　行の一つ護摩木を焚き神仏に祈願する手法。しちくれち…してくれたので。ゴザ…い草で編んだ敷物。ガラガラピカリ…雷鳴と稲光。それでんここらんしゃ…それでもこの辺の人たちは。だけじゃのうじ…だけではなくて。あるめーか…ないでしょうか。ちょるんか…そうあるのですか。バス到着時間…バスが通過する時間前に。１１時予告…昼前の１時間早く知らせる。

７５Ｐ　善神様…主神で難聴の神様。ニワトリ飯…かしわ飯。ドブ酒…甘酒になる途中の濁り酒。コボクレタ…壊れて小さくなった。そきーいくと…そんな時にも。ホホラヌキィ…生暖かい。あさまん…朝の一時。薪とり…一年間の燃料用に取り込む。鍬仕事…主に鍬をつかっての仕事。ヅーゴシガ…腰の痛さをおーばーに。

７６Ｐ　こさかる…今晩から。千願心経…般若心経を全部で千巻唱える。ヤトワレチ…頼まれて。ハナハト…戦前の教科書の読本の一部。オサガリ…着古しを次の者が着る。石版、石筆…石財で作った学用品。ソンママ…そのままに。大事コウジ…とても大切に。ツボ先…庭先。茶アケ…お茶の際のおつまみ。狂言…昔の芝居を現在風にしたもの　素人芝居。持ちあぐる…上手に褒めあげる。

方言は単語では難しくても　上下に連なる言葉文字を見ると　その意味もわかりやすいと思います。

水車あり　飛脚ん走りあり

七瀬川にゃ水車がわりかたあっち　水をうまい具合に使いよつた。最後まじ頑張っち荷取りかる　荷配りまじした　吾一郎は馬じ今市までん行き助かったち　喜ばれよつたごたる。留守番の力持ちん女房タカは　米俵どま軽ぅ持ち上げよったき　そりゃもう皆んなかる大事されよった。戦時中にゃ米ぅ欲しさに　精米所は賑やかじゃつたが　組合の電化機械が入ったら　そん姿もだんだん消えちしもぅた。

野津原かる温見に飛脚が走る　そりゃもう若い娘たちん　憧れん姿じゃつたごたる。明治７年《１８７４》県下じ３０番目ん郵便局がはじめは　恵良に出来た。府内⇨今市⇨竹田を走ったが後に　府内⇨野津原⇨温見⇨竹田に走ったき　道がゆうなると　そこに生活便利さがすぐ　入りこむ理屈になっちょるごたる。

飛脚が通る時にゃ通行人、牛馬、なんか妨害しちゃならん。ち決められちょうたそうな。往還街道が改良された　明治１８年にゃ馬車ん全盛も迎えた。竹田かる今市⇨野津原に下ると　ここじ腹ごしらえしち府内に向かう。野津原でん馬車を引くナリワイも２，３０人がおっち　小岩戸坂、大道坂が難所じゃつた。

明治ん末になりゃこんだ『客馬車』も増えた。銭はいるけんどそりゃもう　楽じゃつたじゃろう。それが大正になるとこんだ『乗り合い』が出てきたもんじゃき　慌てでーたがこれも世の流れになった。そんうち大分⇨温見間に　乗り合いバスが入っち来ち　交通状況は一遍に様変わりしちくる。

ただいつも話題になるんが　柿の坂と掘割ん坂。こん段差がなけりゃ野津原ぁどんくれ　早ぅもちったゆうなっちょつたじゃろぅかなぇ。

七瀬川支流の夢とロマン

七瀬川の一部にゃかってん　安蘇爆発の溶岩が流れちいち冷え　固まった川底がアッチコッチにある。そげな支流でん七夕飾りを流し　乙女心んヤルセナサを　仄かな描くごたる風習も残っちょる。朝露が葉にたまっちチョイト　触るとそん露玉が水銀のごたる　美しさじ転げ回る。

落としたらオオゴトじっと　片方に寄せち茶碗に取るとそん入れ物んに素直に従う色。こん水じ書いたら上手になるち　朝早ぅから競争じ取ったもん。短冊に願い込めち書く字は　人ん心が写し出さるるごたる。切り紙の籠はいつも年寄りん役目。『やっばバアサンな上手』じゃなぁ。

流す日がくると書いた時ん　気持ちはもうだいぶ変わったごたるが　子ども行事ん素朴な習慣な　そげな事もちゃんと知っちょるような　空気が優しゅう変えちもくるる。真ん中に流すと叱られたき　ちっとグロに投げこんだ姿　こりゃまぁお転婆になりそうじゃ。

雨川かる土穴ぇ抜くる道に　板橋がかかっちょる。大水が出てん流れんごつ　橋桁杭穴があるき丈夫に食いつき　ちっとぐれん水にゃ流れんけんど　ゴウソウどま引っかかるとそん時ぁ早ぅ取らんと　次々にゴウソウが流れち来る。それが頭痛ん種でんあった。

ゆうまぁこん固ェ盤に鑿じ掘った　先人の知恵と努力なんかは　とてんチットやソットじゃ出来メエガ。ソリィ水がそん桁柱を避けち流るるなんか　軽業んごたる。ちっと深ぇ溝にもニナがイノチキしよる。渡る世間たぁゆうしたもんじゃふんともぅ。

お遍路姿が菜の花道を

四国巡りが出来ん人たちん為に　野津原を中心に大分かる大野周辺まじ　新四国８８ヶ所札所を　明治３６年９月１日に作り　先達に連れのうち白衣姿が　鈴を鳴らしながら毎日経を唱え　お接待も受けながら　ひたすら仏とん巡り合わせ　絆を求めて多くの人たちが　お遍路して行く。

７日間の行程を無事にお参りする人　長くは無理でも近所だけでもと　参加する人たちや　せめて１日でもと歩く人もあっち　多い日どま７０人もおったりする　春の風物詩でんある。無事に打ち上げとなると　記念碑のある大師堂じ護摩焚き　供養行なんかもあっち　霊場の『お砂踏み』も設置され　これを渡る事で四国霊場に　お参りしたご利益にも。

四国に何回もお参りしてん『ここわここじ参るんで』ち元気のいい老婆は　腰こそ曲がっちょつてん　活き盛んじ若いしにゃまぁ負けられんち　大笑いする風格にゃもう最敬礼じゃつた。自分じ自分を管理する　そん気構えこすが健康ん秘訣とん　言っちょるがまさにそん通り。

遍路姿に変わった途端　顔の皺まで消え失せる　ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ。馬子ん五助さんが向こうかる見よったが　大きな声じ唄うもんじゃき　遍路道中が止まった。ふっと汗が頬を伝わると　風が脇の下からすり抜ける。膨らみん回りを通り抜けち。

馬子は嫌かと背中に聞けば　甘えた大きな首を振る　ハ七瀬のせせらぎ　小鮎が　スイスイ　ホイホイホイ。のぞかな菜の花ん畦道を　お遍路ん列が今日連なるち。南無大師　南無大師　ここはどこの坂道じゃ。

新聞社の疎開と地元ん支援

大分ん空襲が激しくなっち　５月に活版印刷部門が原村に移動　ここでの印刷発行の準備をはじめよった。たび重なる空襲は遂に本社の被害にまで。こん時原村　じゃまだ発行まじんシコは出来ちょらんじゃつた。急きょ共通紙協定ん他社に依頼しち　切り抜け８月１４日に　無事発行にこぎ着けた。がなんとまぁ次ん１５日ん正午　玉音放送がラジオじ放送された。

１６日朝刊にゃそれらん記事が　見事に印刷されち県下に送りだされたなぁ　原村工場からじゃつた。被害の本社から原稿なんかを　運び製版印刷する。輸送手段も木炭トラックで　２つの峠は人の押し支援で。社長自らもトラックに乗り新聞を積んで　夜中の道を大急ぎ大分に運んだ。

急ぎの原稿は組合の電話を利用　組合と工場の運び役は当時の　少年たちで余裕のある者は　自転車で５つの峠を越えて本社え。帰ってくるのは昼過ぎだった。夕刊はなく紙面も少なく『タブロイド版』　一枚だったので原稿量も少なかったから　１回行くと５円貰ったとか。

写真は本社と交替勤務だったが　食料難時代やっぱ原村ん勤務希望が多かったよう。野津原で炭焼きの許可を取り　トラック燃料や暖房燃料にしたが　燃料輸送の時に悲しくもいけない事も。気持ちゃゆう解るわ。地元ん人たちん物心の支援協力は　そりゃもうどんくれ嬉しかったか。

組合も出来る限り新聞関係の　取り次ぎを優先しち原稿ん遅れじ発行遅延は　皆の恥さらしとと一致団結した　協力じあった。

そん証が３６年１０月になっち　原村ん関係者や宿ん世話になった人　なんか約８０人を招待しち　本社ん見学視察と会食をしながら　当時の思い出に花を咲かせた。

こげな疎開の因縁があっち　新聞社が引き上げた２年後の昭和２０年１２月２９日かる　こん原村を舞台にした『青黒い夜の人人』と　題した新聞連載小説が掲載され　聖観寺　組合倶楽部　七瀬川　鳥井野　寺の和尚　当時の村長　組合長など当時の　実在の人物とフイクションを　織り交ぜて挿し絵も地域の風景が取り入れられちょる。

そげな小説に魅かれて燃やした恋心が　結婚にまで進んだ仲睦ましい　カップルの誕生もあった。人生の巡り合わせたぁまさに不思議なもんでんあった。これも前世の宿命をちゃんと受け継ぎ　素直に実行したから　いつまでも想いで話として多くに語られるじゃろうなぁ。

★★★　方言説明　★★★

７８Ｐ　わりかた…予想以上に。ごたる…よう。どま…など。ならん…できない。ゆうなっちょつた…よくなっていた。

７９Ｐ　じっと…しずかに。グロ…すみっこ。ゴウソウ…ごみあくた。チットやソット…それどころではない。ニナ…小さな川に住む貝。

８０Ｐ　打ち上げ…全部参った終わりの行。お砂踏み…霊場の砂や土が入った踏み袋。

83←

蛇の目の傘とは悩ましい

えーと打合せが終わったのが　昼飯前じゃつたき　五助さんもここじ昼飯ぅ食おーかち　ヒヨィト外ぅ見ると　こんめー雨が降りはじめたごたる。『昼まま食ぶるな』『や　じゃのう食うこちしゅうか』　気乗りせんじゃつたが　若い娘に言わるりゃ　むげに断わる事も出来んが　五助さんのいいところでんある。

残った５人ほずん者も　一緒に『トトロ飯』じ　決まったもんじゃき　若ぇ店番の娘も喜くうだ。それぞれが食いながら　たへらく言うのもおりゃ　早起きしたんか横にゴロリ。タバコ一服吸うと家ん仕事もあったき　帰ろうかち思案しよった　五助さんも窓ん外ぅ　恨めしそうに見よった。

『帰りたいんじゃな』　そくう察した娘が　ゆっくりすりゃいい事……やっぱ忙しいんか……『うっとがんぬ使いよ』　五助さんな　そん言葉にタマガッタ。若い娘が『うっとうがんぬ使いよ』　ただ事じゃねぇな。ヒヨカット若ぇ頃に　声をかけられち　相手に恥じぅかかせてん　悪いち思うた五助さん　『若い娘がそげんこつ言うと　男はなにゅするか……』

そげなこつぅヒヨカット思いでーた。『お前がん使うてんいいんか本当に』　真顔ん五助さんの　顔まじまじみると　『いいんで　けんどＯＯん事』　ちょいとしち　『ははーじゃのう　たまがったど』『ちゃりゃ　五助さんらしゅねぇなぁ』　カラカラと笑うと側に来ち　『五助さんな　ウブじゃなぁ』

そこまじ話が進んだが　やっぱ忙しいんじゃろうか　『もうイヌルキ　お前がんぬ貸すか』『いいでちっと古いけんどな　横になると滴が垂るるき　気をつけなぁえ』『そうか色気があるのうふんと』　二人じ顔見合わすると　クスクスと笑う。五助さんにしてん　娘にしてん心ん　ときめきもあったごたる。

階段ぬ足もとふらつかせち　下るるぬぅ手じ支えち　2歩3歩下りる娘ん薄化粧ん匂い。『お前がん使うど』『いいで返すなぁいつでんいいき』『そうか　いつまでん　お前取り来るまじでんいいか』　気を揉ませるごたる　話ん組み立てがやっぱ上手じゃき　みんなかる好かれるるんじゃろう。

履物ぅ出しち『ちょいと待ちよな』　奥に入ったち思いよると　使い古したごたる　『蛇の目ん傘』　『これかこりゃ横にすりゃ　滴がのぅ』『じゃろう』『しょわねえ　マトモもにさすき』『えっ』　艶かしいごたる語りに　娘もふっと紅潮した自分の　顔んほてりが感じられた。

たしか都都逸にあったような　唄が脳裏を掠めた。五助さんの馬子道中にゃ　こげな隠し芸の人たちにも　出会うもんじゃき　何でん浅く広ぅ知っちょる　そげな事もあった。こん唄もたしか昔聞いたが　なんと粋な唄の中に　人の情愛が隠されてん　おったもんじゃつた。

店ん娘ん優しい心くばりじ　濡れんままに帰りちーた五助。ていねいに乾かしち　すぐ返す事は忘れんじゃつた。傘なんかは日頃ぁ用事がねえき　あんまり大事なもんたぁ　思わんけんどが　急な雨にゃそれが　破れ傘でん絶対いるもんじゃき。心の感謝はすぐ返しち　次の時の間に合わする。それが心んお礼でんある。

ひさしぶり天気になったき　なにはさておいち　傘を返しに店に行くと　『あいにく風邪ひいたごたる　ヨコウタに』　五助さんはそん足じ　すぐ家に尋ねた。ちった気分がいいんか起けち干し物ん姿に　ほっと安心した五助さん。『こげな娘が病気じゃムゲネエ』　大丈夫　若いんじゃきすぐユウナル。心優しい風が爽やかに　流れち来たごたる。

小豆の選別も泥の手が

北風が肌に冷とぅこたえる　夕方泥のついた手は　もう冷たささえ感じる。子どもは風呂焚きか　男の子は駄飼い　娘は夕餉のダンゴジルが　独特な味噌の匂いになっち　山肌まじ流れよる。通り合わせた　顔見知りん青年に　立ち上がると声をかけた。寒さに多少はかすれちよるが　人ん情けがこめられると　そん声も人ん心にゃ伝わるもん。

『ちょつと待って　小豆ちっとじゃけんど　持っち帰りよ』毎年んごつ丹精こめち　作った小豆はここじゃ　こうだいなもん。でん人に差し出す　そん心使いの優しい　おもてなしは　こん不便な場処ん生活に　限り無い潤いもあった。疎開しち地元ん人たちとん　間じ辛さ厳しさとん　戦いがもう５年も続いた。

戦時が自由を許さぬ時　将来の希望も託したここじ　もし将来の夢にたどり着けば　生涯の里としてもと覚悟しちょつた。現実は甘くはなかったが　来た以上は隠忍自重　耐え忍ぶ暮らしの中じ　人の真実の誠意は　金や物では替えられないと　初めて知る人間哲学。

耐えた影で子供も頑張る　暗い夜道に炭を売りに。帰り道では生活に欠かせぬ勉強も。そん積重ねが人一倍　強固な精神力も生き方も身につき頭に蓄えた。田植え機や培土機購入などにも挑戦した成果は手の豆とともに　実りを満喫した。老婆の泥の手で選別した　小豆の輝きは心の輝きでもある。

『いつもすみません　遠慮なく』　見返りながら送ってくれる見知らぬ　土地での人とのふれあい。そこにはいままで感じも得なかった人間の　真の姿もかいま見るのだろう。裕福な暮らしから疎開の憂き目。だが人は苦労してこそ　頭もさがる稲穂かも知れない。

頂いた小豆を子どもの　遊び道具の『オサシ』に入れ　保存にも種失いの不安も　ない生活の方便にもなった。近所に子供が生まれたと聞き　『じゃあんもらった　小豆じ赤飯』　そこにも人ん親切と優しさが回る。疎開した人から頂いた小豆がお祝んお使いしてくれた　なんと巡り合わせの　幸せ人生。

米すりん機械が多いもんじゃき　組内んしたちに気を使う。坂道を運ぶ時どうかすりゃ　愚痴めいたたわごとも聞くが　ぐっと我慢した時に人間は　ぐっと成長もするもん。横じ見よった子供も感じ取るき　咄嗟ん時ん動きは早ぇ。怪我したき医者に連絡してえが　聞きつけた子供が走った。

いっときしたら医者が馬に乗っち　来てくれたもんじゃき　そこんしもたまがった。『まぁあん子が行っちくれたん』　それにしてんゆうまぁち　聞いたところが何と　学校ん行き来に笑顔じ挨拶しよった。それが医者ん目に止まっちょつた。来た時そこんしかち聞くと　近所んしじゃが誰でん　早く診ちほしいち言う　あん美しい目に感じいったそうな。

『目は口ほずに物を言う』ち　こん医者も診察ん時ん指針にしよるき　それが的中した怪我ん巧妙か。人ん真心は通じるたこん事かん知れん。小豆が生まれた赤ちゃんの祝いに　笑顔が急病人の処置の早さに　これ全てが心の信が　人ん心を動かしたんじゃろう。輪廻ん世界を地じ行くごたる。

故郷に帰った後も大きな　事業に挑戦しち見事成功。じゃがそん功績ん社員に褒美に譲り　得度しち僧侶に転身した。でん感謝ん交信は６０年も続け　常に安否を気使う高貴さは　真似が出来るもんじゃなかろう。まさに仏となった化身の　この世に施しをつづける真の姿かん知れん。そこに生かされた幸せな心ん　証があったきじゃろう。

★★★　方言説明　★★★

８３Ｐ　ヒョイト…もしかして。やぁじゃのぅ…そうでしたなぁ。ほずん…ほどの。トロロ飯…山芋のすりおろし調味したかけ汁を飯に乗せた丼。たへらく…自慢話を得意に。そくう…そこお。うっとうがんぬ…私の物を。ヒョカット…急に思いついたの。そげんこつぅ…そんな事を。お前がんぬ…あなたの物を。使うてんいいんか…使ってもよいのですか。ちょいとしち…もしかして。じゃのぅ…でしょうかな。たまがったど…吃驚したのです。ちゃりゃ…あらあらどうしょう。

８４Ｐ　いつまでん…いつまでも。まじでんいいか…までも使ってもよいの。じゃろう…でしょう。もんじゃつた…ものでした。なにはさておき…いろいろあってもこれを優先して。ヨコウタニ…休んでいますが。ムゲネェ…可愛いそうに。ユウナル…よくなるから。

８５Ｐ　ダンゴ汁…小麦粉を練ったダンゴを延ばして　具財と煮た代用食。ちっとじゃけんど…少しですが。こうだいな…大切な貴重品なのに。

８６Ｐ　オサシ…小さな袋に小豆などいれて　手遊びに使う子供の遊び道具。じゃーあん…ではあの。いっときしたら…まもなくに。そこんしも…そこの家の人も。まぁゆう…よく聞いてくれて。じゃが…ですが。

★　ダンゴ汁…豊後地方に江戸期頃から　代用食として食された　小麦粉利用の夕食を兼ねた食べ物の　代表格でもあったので　戦時中は格別に拡大された　利用方法が普及した。都市では『すいとん』とか　地域により『ほうちょう』などとも言うが　材料はほぼ共通しているが　作り方などが多少異なる。さらに『やせうま』などにも　飛躍する。

五助さんが人気がいいんも　物知りじ誰にでん話しを合わせ聞かるりゃ　嫌とは言わんし自分じ　返事に困りゃ調べちでん知らせちゃる。物好きち言うか　人に好かるる要素も持ち合わせ　ちょるけんじゃろう。優しい上に親切じゃき　女にモテルんもあるが深入りゃ　これまた苦手とあって　それがいいんかん知れんな。

アオょ勇めよ　宿場はそこじゃ　あれが街道の石だたみ
ハ　七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ。

宇曾に行こうか　荒木に出ようか　四辻峠の思案顔
ハ　七瀬のせせらぎ　小鮎がスイスイ　ホイホイホイ。

あん娘年頃　姉さんかぶり　いつか覚えた馬子唄を
ハ　七瀬のせせらぎ　紅葉がチラホラ　ホイホイホイ。

三筋たなびく　炭焼く煙りが　山肌に流れよるぬ　見るとどうやら明日どま　炭だしかん知れん。顔を炭じ汚したんも働く姿なりゃこすん　風情じゃき　美しさも醸しださるる。

肥後ん糸家ん吉兵衛さんが　京に上る時腹痛起こしちかる五助さんに　世話になったんも　巡り合わせん人生じゃつたが　人の出会いたぁまぁ　不思議なもんじ　方言集ん調査に取り組んじ２５年。多くん皆様に支援していただき　今年も発行にこぎ着けました。

これも　ご愛読頂く皆様の　お陰で言い換えると　発行の要はご愛読の皆様と　感謝しています。素人集団の粗末な冊子ですがこれからも　継続発行の予定です。ので引き続きご支援よろしく　お願い申し上げます。健康管理に心くばりされまして　お元気な日々を　ご祈念申しています。

馬子の五助

方言學語

← 89

方言単語集　№７《続編№１１号から》

単語の散らばりに　一般的に使われて来た　生活用語の単語を№１１ごうから　１１７３８語掲載しましたが　それに続いてこの続編１７号《通算２７号》にも　掲載しました。同じ単語でも意味の異なるもの　全く今は使われないもの　なども入っていますし　使ってはいけない　差別用語も方言集の　性格上入っていますので　ご了承ください。

《く》クオーモンナラ……食べるもんなら、食べられる事なら。
クオードチ……食べようとおもって、食べらるるもんなら。
クオモロウチ……苦労を貰えば、苦労することで。、
クオヨラニャ……苦労は選ぶも、苦はより別けてする事。
クオナラケーチ…苦がないように努力して、苦労も平等に。
クオシズミー……苦労は早めに始末、鍬を沈めてよく洗う。
クオカルウ……苦労はかるい合う、苦労分け合う気持ちも。
クオミリャラキナル……苦労のあとにゃ楽もあるもの。
クオミルンモ……苦をみれば楽な時も、苦労と楽は共存。
クオマジャ……食うまでは予測せん、食うまでは油断禁物。

クオーアロチョケ…鍬をよく洗って、使った後は使う準備。
クオミテン……苦労しても無駄にせぬよう、無駄な苦労は。
クガネエシャネェ……苦労のない人間はいないもの。
クガマワッチクル…苦が来ても楽に近づく、苦労楽が交互。
クガネエナ……苦がなくて、苦労がないのは油断の始め。
クガニゲタ……苦が逃げるほど頑張った、楽に負けた苦労。
クガノウナリャ…苦労がなくなると、苦がない天下が希望。
クガゼニュ……苦労が銭を生み出す、苦労が稼ぐ銭。
クガアリャコス…苦労があれば努力も出来る。苦は楽の始。
クガアルキ……苦労があれば頑張りも、苦は楽の道知るべ。
クカジュウカ……九か十か、いずれがよいかは人次第。

《く》　クギガヤクスル……釘が大きな役割、釘が役立つ。
クギユーヌゲ……釘を抜きなさい、釘を抜かないと。
クギッチョケ…区切っておかないと、区切りをはっき。
クギュフムナ…釘を踏まないように、釘に気をつけて。
クギマジキンナ…釘を切らないように、釘に気をつけ。
クギコス……釘なればこそ、釘が大きな役割、釘なら。
クギルケンド……区切っておくから、区切れば大丈夫。
クギッチョケ…区切って整理を、区切りをしっかりと。
クギジャキコス……釘であったから、釘が役立つから。
クギチャル…区切ってあります、区切りをしっかりと。

クギンゴタ……釘のようにはゆくまい、釘が重宝な物。
クギドマ……釘を使えば苦労なし、釘の出番が来る。
クグリャ……潜って行けば、くぐったなら大丈夫。
クグッチョケ……潜って行きなさい、潜っておけば。
クグリモウサン……潜られないから、潜るのは無理で。
クグンナリャ……潜ってすぐなら、潜ってよかった。
ククジソロバン……そろばんの九九で計算する。
ククマジン……九九までの算盤勉強、算盤の計算方法。
クグッタンカ……潜ったのですか、くぐったのなら。
クグラニャ…潜らないと、くぐれば通れる、難所通過。

クグリヌケチ……くぐりぬけたようで、潜ったのなら。
クグッテン……潜っても油断出来ぬ、潜った後が不安。
クグルリャ……潜られるなら、潜ったのなら合格だ。
クグロドチ……潜り抜けようと、潜れれば大丈夫。
クグレメェ…潜られないだろう、潜るには苦労するが。
グズグススンナ……のんびりしては、呑気では負ける。
グズッチ……機嫌が悪いようで、手こずって困るが。
グズットン……おとなしい事で、手をとらない機嫌。
グズニュウ……頼りにならないような不機嫌な様相。

《く》　クゴデンイイ……九合でんいい、ちっと足らんでん。
クゴナラハエー…九合ならすぐ一升。ちっとぐれは。
クゴアリャイミル……九合ありゃすぐいみる。
クゴメニャ……九合目にゃ頑張れるる、あと人息じ。
クゴミャカクルル…屑米は隠れる、小粒じゃきなえ。
クゴンジミヨ……かかんでみては、しゃがみこんで。
クゴマジャイイ…九合までなら堪えよう、遠慮限界。
クゴメンアジ……厳しい屑米の味、節約とは厳しい。
クゴージョル…折れ曲がっている、うつむいている。
クサトリャ……草取りをしよう、除草しながら。

クサレ……いじわる、陰湿ないじめ、悪質な性格。
クサムシリュ…草取りを、除草して美化に様変わり。
クサレエンデン…巡り合わせの縁、宿命の縁である。
クサビャモツモン…楔の効能、なくてはならない鍵。
クサラニャ……腐らないと、腐敗しない処理をして。
ササヨリャ……笹よりも、他にない利点もあるもの。
クザスナキオツキ…下痢には用心を、健康管理大事。
クサッテンタイ……腐っても名声がある、価値観の。
グザグザ……崩れて形もなくなった、形態が哀れ。
クザモウチ……酔っぱらって形態が不安、悪い風体。

クジグジ…くどくどと、悪態に嫌われる、喪失状態。、
クジュユーナ……愚痴は言わない、相手の心情も。
クジローチ……愚痴を押しつけて、人のせいにする。
グジャツチ……崩れてしまった形態、前後不覚に。
クジュユーナ…愚痴は言わない、誰でも不平はある。
クジュユート……愚痴言うと恥さらし、人の身にも。
クジッチョル……ぐずぐず不満があるのか、甘えが。
グジグジユウナ…不平不満を言う物ではない。忍耐。
クジュユウソバカル……愚痴言う側から甘えて見る。

《く》　クジュ……文句を、愚痴を、反対意見を、意見対立。
クスットン……少しも、冷静さが、物怖じしない。
クスブリャ…いぶしたら、煙りで痛める、煙りの消毒。
クズズリャ……壊れたら、痛んで悪態に、醜い有様。
グズットン……微動だにしない、静かに動かずに。
クスリャ……薬は、薬の場所は、苦労すれば楽もあり。
クズリュウト……壊れようと、壊れたとしても。
グズツキャ……悪いほうに、気分がすぐれず、異常に。
クズニュー……煮えきらない、不安定な格好、醜態。
クズルル…天気が悪くなる、物が壊れる、皮膚の壊れ、
話が失敗する、崖が割れ落ちる、表面痛み。

クズゴメモ……屑になった米も、不良米でも、価値は。
クズレタ……壊れた、痛んでしまった、利用不可能か。
クズリュウト……壊れたとしても、使えなくなっても。
クズジャ…屑になるのでは、使用不能か、勿体ないが。
グズグス…のんびりして、おちつきはあるが、不安も。
クズンオオメシ……屑の大飯、腹持ちがしない。
クズルリャ…壊れたら、痛んでしまったら、利用不能。
クズンジョ……屑ばかり、生かした使い道は、不良品。
クズサンデン……壊さなくても、最良は不可能か。
クズシタカ……壊したの、整理整頓が、分類の必要も。

クゼ……屑、利用次第では役割も、生かした方法も。、
グゼルンカ……気分が優れないか、気持ちも察して。
クゼマイデン…使い方では、生かす方法も、出番開拓。
クゼンツウ…物足りぬものでも生かしたか、有効利用。
クゼンナコマル……気分の優れないも困難、気持大事。
クゼルキ……気分が落ち着かない、感情の不安さ。
グゼングゼンノ……酔っぱらった酔態、良識の逸雑。
クゼタナ……理性はずれは、酔態では哀れ、良識逸脱。

《く》　クゼリャ…気持ちがわるいか機嫌が悪い、気分が悪い。
クセコスイカセ……七癖あるのを生かす生活上手。
クゼツウ…崩れている有様、崖くずれした場面の様相。
グセ……人にある癖の表現、泣き癖、叱る癖、怒る癖。
グゾムゾ…悪態の集まり、役立たずな周囲、烏合の衆。
クソマニャ……悪質な人まね、陰湿なものまね。
クゾンハテ……竈の側に、竈の回り、竈の周辺。
クゾンオキャ……竈の残り火、竈に残した火の塊。
クソアチー……意地悪く暑い、真夏のひどい暑さ。
クゾンハイマジ…竈の灰まで、遺産にはこんな物まで。
クゾ…竈の事だが周辺や中など　引用した方言は多くて
灰まじ…なども悪態な言い方に。欲張りがあ親の
面倒は見なくても　欲しがる様が例えにもなる。

グタグタ…盛んに煮える、雑多になって、荒れ果てた。
クダシチカル……下痢しているのか、腹具合が悪い。
クタロウカ……食うたでしょうか、食べたでしょうか。
クタバリャ……痛みつけられたら、死んでしまったら。
クタカエ…食べたですか、食べましたか、食事すんだ。
クタゴツ……食べたでしょう、食べたように、食事の。
クタゴタルナァ……食べたようですね、食べたですか。
クタライクナ……食べたら行きます、食べて行きます。
クチミズ…思わず手が出るようなご馳走、絶妙な話に。
クチャクチャ……乱れてしまいそうな、不安定な心境。

クチュアケチ……口をあけて、口の検査します、はい。
クチャサキ……口が先の性格、手より口が先の語り手。
クチャネ…食べては寝る、食う寝るの性格、いつ働く。
クチキタノ…ののしる悪口、人の悪口雑言、言葉難儀。
クチャツミュ…口が災いの元づくり、口の言いようで。
クチュシボル……食べ物の欲張り、口減らし趣味。

《く》　クチュタタクナ……物言いさせない、問答無用では。
クチミダタレチ…物乞いみすぼらしい、物ほしそうな。
クチニャ……口には、話の仲間には、相手もいれたい。
クチグチナンカ…手前勝手に、自分の主張、勝手気儘。
クチヤシボ……いやしい性格、食べ物欲しがりな。
グツンスツトン……無頓着な嘘言い、予想外な発言。
グヅットン……少しも動かず、冷静な挙動、静止状態。
グツガキレン…引ききりがない、団結不足、待てない。
グツニュウ…引ききりがない、決断がはっきりしない。
グツチャリ……崩れて動かず、静止状態の不安。

グツデン…嫌われ者でも、人並みでなくても、利点も。
グツジャ……嫌われ者、仲間はずれ、性格が異なる。
グッタギリ……乱暴に切る、粗雑に処理する。
グツガヤ……少しのんびりだけど、予想外の時もある。
クデドモ……嫌われ者でも、特技は持っているもの。
クデデン……粗雑な物でも、使い方では有効、組合せ。
グテネリャ……いじけて見る、注意を引き付ける。
グテヌリャ……心配かけらせる、気を揉ませて。
グテングテン……酔つぱらって、酩酊状態、醜態な。
クデニマメセ…屑に入れるとバランスよい、配合工夫。

グデンツゥ……壊れて困った、利用不能の心配がある。
グデガヤキタツ……屑でも使いようで、工夫で成果も。
クデワリャ…屑を割って使えば、生かしかたで役立つ。
クデツウ…壊れた場所の、早めの修復で、早期補修を。
クデンジョウ…屑ばかりだが、使い方では役立つもの。
クデドマ……屑でも役立つ調理法、屑も使いようで。
クデンツウ…屑だけに使い方で見直される、適材適所。
クデヨシュ…屑を集めて豪華版、見直される利用法も。
クデンママ……屑のままの姿煮、姿が生かされる。

《く》　クデマジャ…屑までは、屑まで使わなくても、屑利用。
クデガヤキタツ……屑でも使いよう、うまく利用する。
クデワリャ……屑なども割って利用、屑割るのも理由。
グドサレ…使い物にならぬ苦言、言いつけを聞かない。
クドンハイマジ……竈の灰まで、遺産は竈の灰までも。
クドンハタン……竈の側で、竈の側は暖かな場所で。
クドキヤイレチ…口説きをいれると効果、口説き場面。
クドンワキャ……竈の側は別天地、竈の側の立ち話。
クドンマイ……竈の前に来たら、竈の前は暖かな場所。
クドスミャ……竈の墨は真っ黒、竈の墨は落ちにくい。

クドンハテ……竈の側の集い、竈の周囲は人も集まる。
クドナラ……竈ならいろんな調理も、沢山の料理が。
クドクドユウナ…いろいろ愚痴を言わない多言は禁句。
クナクナ……ひょろひょろして頼りない、微弱な体格。
クナンカヘトンネエ…苦労など気にしない、苦労感謝。
グナジン……飄々として頼りない、咄嗟の用事が無理。
グナラマミー…具が出来たら混ぜて、混ぜ合わせ寿司。
クナリャ…来てすぐなら、ちょっと休憩してからでも。
クニナランカ……苦になりませんか、気にならないの。
クニナルカヤ……気になりますか、苦になって心配症。

グニャグニャ……取り扱いに苦労する、掴み所が至難。
クニスリャ……苦にすれば、気にしても節度がない。
クニモナランカ……苦にしても仕方なし、気にしても。
クニニャナルメエ…苦にはしていないから、苦にせぬ。
クニナンノナラ…苦になるようなら、きになったなら。
クニセニヤコス……苦にしたとて、気にしてみても。
クニシテン……苦にしたとて、気にしないが得策。
グニャ…崩れつぶれる、崩れかかって手がつけられぬ。
クニスンナ…気にしない事、苦にしたとてなるように。

《く》　クニモナランカ…苦にしてみても、気にしても仕方なし。
クニナリャ……苦になるならば、気になりゃ始末を。
クニセンジ……苦にしなくても、そのうちに相手も。
クニナンノナラ…苦になるなれば早めの手を、早期決断。
クニシテン…苦にして見たところで、知らぬふりも勝者。
クヌギャスミー……くぬぎの木は木炭に、木炭には良質。
クヌギンコマウチ……くぬぎの原木にこまうちを。
クヌリャコマル……へそ曲がりにゃ閉口する、変態気質。
クヌリヘネチ…気分がすぐ変わる異質な性格、損する人。
クネットヨケタ…上手なよけ方、うまく交わすつわもの。

クネッチ……ねんざして、骨を痛める不運、弾みは怖い。
クネクネシチ……曲がりくねった性格、道路、迷路道。
クネチョキャイイ……くねらせておく、曲がった構図。
クネッタゴタル……捻挫したようで、捻挫の繰り返しに。
クネテン……くねらせても、曲がりが多くても、迷路。
クネリソコネチ……捻挫しこねて痛む、捻挫は油断大敵。
クネリャ……くねらせると、無理は大事に連なる。
クネタンカ……捻挫したようだが、捻挫は用心を。
クネラケーチ……くねらせたようで、捻挫の心配も。
クノネーゴツ……苦労のないように、苦労は辛いもの。

クノミモイイモン…くろうするのも良薬、苦労して楽を。
クノミパナシ…苦労ばっかりも、苦労が付きまとうのか。
グノモンナソロウタ…具が揃ったなら、混ぜ飯の仕上げ。
クノアタラクド…苦労の後には楽のご褒美が、苦の後楽。
クノタニャ……苦の谷の後には楽の山が待っているもの。
グノモター……具の元には取り合わせの材料あり。
クノネーゴツ……苦労のないように日頃からの精進を。
クバッタンカ……配ったの、漏れはなかった、完全配布。
クバリマエーチ……全部配って、そこないのないよう。

《く》　クバッチ……配って、配布して、配ってください。
クバンナァ……配ってください、配布する、九番のは。
クバルャリ……配れますか、くばれるようなら。、
クバリソコネチ……配り間違えて、よそに配って。
クバレメー……配れないだろう、配るのは無理では。
クバルネキ……配る周辺、配る側で、配っていた側に。
クバローチ……配りましょうと、配ろうとしていたら。
クビー…燃えさしする、燃えるのに追加する。くぼ地。
クビラニャ……束ねないと、束ねて仕上げる、梱包。
クビリャ……束ねると、束ねて見ると、束ねて安定。

クビートコリ……くぼ地の場所に、低い場所の修理。
クビッタント…束ねたのです、束ねたよう、梱包する。
クビュアラエ……首をよく洗って、覚悟しておくこと。
クビュツツコム……何にでも入りたがる、すぐ口出し。
クビタゴケーチ……首を捻挫したようで、首の不具合。
クビュウノー……火に注ぎ指し、おい焚き、首を出す。
クビッチョケ…束ねておいたら、束ねなさい、束ねて。
クビリャ……束ねると、束ねたのだが、束ねましたよ。
クビッチョク……束ねておく、束ねて格納すね。
クブグレージ…九分くらいなら、ほとんどが出来たが。

クブリャ……焚き添え、燃やすのに差し足す。、
クブルカ……焚きつけますか、おい焚きしますか。
クブカリャ……九分刈りなら早い、九分刈りからなら。
クブゥウミー……くぼ地を埋めて補修、くぼ地に土を。
クベタナ……焚きつけたのなら、焚きつけすれば沸く。
クベタカ……焚きつけたか、焚きつけすればよい。
クベスグンナ…焚きつけが多いと危険、焚きつけ用心。
クベチョキャ……焚きつけておけば、焚きつけすれば。
クベタラン…焚き付けが少ないよう、焚き付けを多く。

《く》　クベソボクル……燃やすのに差し入れ遅れして消えた。
クベチャレ…燃やすのに差し入れて、薪を差し入れて。
クベチョケ……燃やすのに追加して、薪を差し入れる。
クベタガル…燃やしたがって、燃やすのが好きなよう。
クボンワレミ…くぼ地の割れた場所、低い割れた場所。
クボウジョツチ…しゃがみこんでしまう、座り込んで。
クボンアノウ……くぼ地の穴に、くぼ地の穴を。
クボミャヨキー……くぼ地はよけて危険、路面に注意。
クボチデンイイド……くぼ地でもよいから、段差でも。
クボタエクボ……くぼ地もえくぼに、見方で可愛いい。

クボタマリン……くぼ地に水が湛る、水たまりの場所。
クボタレ……くぼ地の不具合、使いにくいくぼ地。
クボンツウ…くぼ地は使い勝手が悪い、使いにくい地。
クマレタンカ……汲まれましたか、組まれたのですか。
クマンコチニャ……組まない事には、汲まない事には。
クマンサキカル……汲まない前から、組まないのに。
クマリュウカ……組まれますか、汲まれるのですか。
クマセニャナ……汲ませないと、組ませないのなら。
クマセチアツゥ……組ませて後は、汲ませてください。
クマレンコタネェ……汲まれ事もないが、組まれない。

クマスリャ……組ませる、汲ませる、汲むことで。
クマンジョコウ…汲まないでおく、組まないようです。
クマニャ…組まないと、組まないまま、汲まないから。
クマンデン……汲まなくても、組まないので。
クマンジコス……汲まなくてよかった、組まないから。
クミオウチ……組み合って、くみあう事から始まる。
クミテケンド……汲みたいのだが、組みたくてでも。
クミンシニ……組み内の人たちに、内輪の人たちに。
クミタガッテン……組みたいと思っても、汲みたいが。

あとがき

方言単語《あ⇨ア》から　《く》まで１２３４５語が　続編の№１１《平成２１年発行》から　この１７号までに入っています。単語ですから同じ発音でも　意味が異なるものがあって膨大な数になりそうで　《わ》にたどりつくと　約５万語になりそうです。お楽しみにご愛読　お願い申します。

野津原で使われた　生活用語の方言単語には　地元で生まれ育つたもの以外に　周辺から《結婚や転居》　肥後《江戸期》大野直入府内《合併行政など》　などから入って定着した　心に入った言葉が　そのまま生活用語となった。そんなニアンスが伺えます。大事にされて来た証なのです。

★　表往還街道は　肥後街道とは別に　明治になって開発された熊本に通じる　表街道的な幹線道《現在の４４２号線》を　馬子の五助さんが　時代は古い頃から現在まで　豹変しながら当時に溯った　話題　こぼれ話　を堀り起こして記録に残しました。伝承　民話　馬子歌なども。

母は達者か小岩橋を　越えりゃ背の子も　荷も軽い　ハ七瀬のせせらぎ　サラサラサラサラ　ホイホイホイ。五助さんの美声が　山肌に三筋流れる　炭焼きの風景によく　調和しています。昔ん農作業　方言子どもの世界　女性の底力　玉手箱　などふるさとの味　民話伝承　あげな話こげな話題　ちょっと一服と　交差させながら　軽やかなリズムに乗せて……。

『肥後街道　五助物語』が　大変面白かったと　沢山の励ましを頂きましたので　『表往還街道』を　５回に分割して掲載しています。野津原のよさ　人情をそっと滲ませた　大分市の奥座敷野津原として　皆様に愛されたらと　念じています。心に残る古い生活用語の　野津原方言ご愛読感謝申しています。

伝言板

《No.１８》

野津原方言集《通算２８号》ご案内

五助表往還街道物語No.３　ふるさとの味
あげな話こげな話　方言子どもの世界
民話伝承　女性の底力　玉手箱　方言単語
ちょっと一服　昔の農作業　方言単語など

素人が『今なら何とか記録に残せる』と　発足した方言調査会　やっと発足２５年目まで　辿りつきました。この間には多くのご支援　ご愛読を頂いて　資料を生かした記録が予想以上に　掲載されました。改めて　感謝のお礼を申し上げます。

愛読される皆さまの　影の励ましがあったからこそ　心燃やして頑張っています。ので引き続きご支援　よろしくお願い申し上げます。毎年限定１００冊を　収拾　編集　構成　印刷　製本　すべて会員の手づくりでの発行です。大分図書館など　関係方面に謹呈のほか　ご希望の愛読者には支援実費で　頒布郵送しています。

大分市大字竹矢０５７２　野津原方言調査会
☎０９７⇨５８８⇨０５７２
事務局⇨５８８⇨００９２

スタッフ　会長　小野寿祐。
編集　那須政子、赤星ヨシミ、佐藤源治。

★★★　こげな話あげな話　★★★

野津原じゃ田植え準備が　はじまったごたる。昔とチゴーチ機械が田の中ぉツージ歩く。そりシテン昔や水がのうじ　高ぇ所どま畑ばっかりじゃき　田植えが羨ましかった。所がじゃな野津原郷ん庄屋じゃつた谷村ん　工藤三助さんが殿様ん　許しやら隣ん領地ん許しなんかを　ソリャモウ長い間苦労しち　えーと許可ももろうち　難工事もしたもんじゃき　湛水にはるばる山谷ぅ越えち　水がオジイゴツ流れち来た。

三助さんなコンメー頃かる　なんとか皆んなに水引いち　米を作るゴツ骨折ったんが　旨い具合に出来ち今どま　もうそげな話ぅする事も少のぅなった。浮動岩ん固えのなんの　話しならんごたるぬ　夢枕に知恵を授かっちそん方法を　取り入れたらふんと　無事に岩も取り除くこち成功　こん水路含めち３水路が　完成した功績ん記念碑が湛水にある。

そん三助さんがノーナッチ今年ぁ　２５５年になるが改めち　そんご苦労に感謝せにゃなるめー。特にこん水路を歴史に残すこち執念をかけたしがおるが　こんしの祖父も父親も　同じ井路ん役職でんあったき　尚更ご執心の取り組みよう。つぶさに写真や現地ん話なんかも　まとめあげちそん出来にゃ　長年役職じゃつた長老ん　那須量さんも　『歴史記録に賛意』と　称賛しちょつた。そん子も水利番所ん勤務なんか　人ん巡り合わせは自然と　寄り添い形作られちも行くもん。記録作りに挑戦した　佐藤昌史さんも役にたち嬉しい思いでと　さにら夢も膨らせていたが　惜しき他界今年１０回忌を迎える　惜別な思いが悲憤に変わるよう。

宝永４年《１７０７》完成した　世利川井路は直入、朝地、庄内、挟間、野津原大分の３つの市に　広がり総延長は約８４キロ、受益面積は約４４０ヘクタールになつちょる。

特Ａ

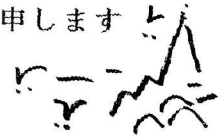
湛水にある功績記念碑は　脇水がしたたり落つる緑陰にあるが碑文は　３つん井路に執念燃やした　当時ん苦労かる農民の喜びまじが　入りいまも尚毎年田植え前にゃ　水神祭りもご遺族参列の中じ　厳かに行われちょる。水があればこそ米が植えられ　農家ん収入にも大けな役割ぅ　果たしちくれた。

幕末にゃ勝海舟や坂本竜馬が　急きょ長崎に赴く途次　ここで仰ぎ見て先人のご苦労に　感謝し自分たちもその心に　あやかりたい　そげな思いじ長崎に走ったが　万事予定とおりの帰途は心も和む思いで碑を見上げ　意志の強さを学ぶ決意もしたとか。馬子の五助も旅の人たちに　道中こんへんじゃ『三助と水路』ん話に花を咲かせち　馬子唄が所望されよったそうな。

清貧糊口厳しい時もあった　三助さんも結果がよければ　全て『よしとしょう』と　世話になった多くの人たちに　感謝の思いで今は当時を振り返っているのでは。

方言集にも肥後街道旅日記として　平成３１年１０月発行分から　シリーズ物として掲載いたします。肥後街道周辺ですので主にそん範囲に限定さるるが　偉人の業績と農民の期待が　無事に成功した水路の話は　珍しいと早くもエールが　届いています。現在こそ米が重要視こそ　されませんが日本人の　主食であった米は　戦時中は供出の矢面にあり　年寄り女子どもだけの　家から心血注いで作った　大切な食料でもあったのです。

供出が出来ないと強権発動もあった　そんな歴史の中で歴代栽培された米には　かかせぬ水だけにその存在は　大きく尊い物でもあったのです。その水が遠く離れた　他領地から山谷越えて流れ着く。夢やロマンがあった水の旅。三助さんのご苦労に　改めて感謝申し上げます。平成３１年まで　お待ちお願い申します。皆様のご支援ご愛読よろしく　お願い申しあげます。



特Ｂ